

地質調查所報告

第九號



昭和十五年十二月廿日

昭和廿五年三月廿日

地質調査所報告第九號

明治四十一年十二月

目次

九州ニ於ケル金銀鑛山ノ狀況

一頁

清國浙江省杭州府附近調査概報

八七頁

九州ニ於ケル金銀鑛山ノ狀況

九州ニ於ケル金銀鑛山ノ狀況

目次

總説.....一頁

一金.....七頁

明治十九年ヨリ同三十四年ニ至ル期間.....七頁

明治三十五年ヨリ同四十年ニ至ル期間.....一〇頁

二銀.....一五頁

明治二十一年ヨリ同二十九年ニ至ル期間.....一六頁

明治三十年ヨリ同三十四年ニ至ル期間.....一七頁

明治三十五年ヨリ同四十年ニ至ル期間.....一九頁

鑛山ノ災害.....二一頁

一般鑛業ノ發達.....二二頁

鑛業ノ獎勵.....二三頁

鑛山ノ狀況……………二三頁

一 大口及布計地方……………二五頁

二 山ヶ野及漆地方……………三〇頁

三 芹ヶ野及羽島地方……………四〇頁

四 伊作地方……………五三頁

五 鹿籠地方……………五七頁

六 池田地方……………六〇頁

七 星野及鯛生野地方……………六六頁

八 玖珠地方……………七八頁

九 溝部地方……………八一頁

十 波佐見地方……………八四頁

# 九州ニ於ケル金銀鑛山ノ狀況

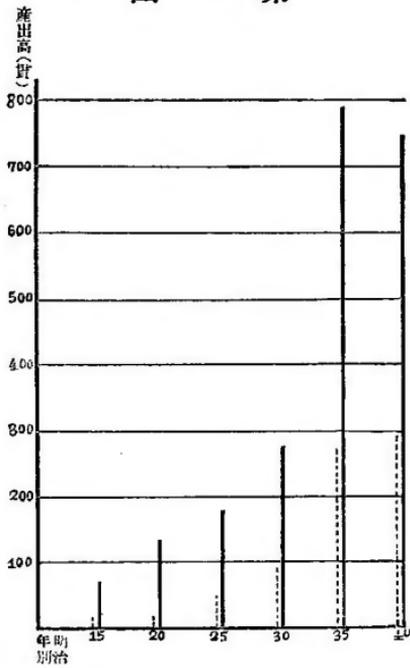
農商務技手 仲佐貞次郎

## 總說

明治四十年ニ於ケル本邦(臺灣、樺太ヲ除ク)ノ金産出高ハ七百四十八貫八百一匁ナリ、而シテ同年ノ九州ヨリノ金産出額ハ二百九十三貫二百十匁ニシテ實ニ其三割九分ヲ占ム、更ニ溯リテ每五箇年ニ於ケル本邦及九州ノ金産出額ノ比率ヲ檢スルニ第一圖ニ見ルカ如ク九州ノ金産出額ハ明治二十五年以後ニ於テ増加セルコトヲ知ル、即チ明治三十五年ニハ其三割四分、同三十年ニハ三割五分、同二十五年ニハ三割一分、同二十年ニハ九分、同十五年ニハ一割ヲ占ム

明治四十年ニ於ケル本邦(臺灣、樺太ヲ除ク)ノ銀産出高ハ二萬四千二百八十五貫百七十二匁ナリ、而シテ同年ノ九州ヨリノ産出額ハ五百六十

圖 一 第



——ハ本邦ノ金産額  
 - - - -ハ九州ノ金産額

六貫七百四十六匁ニシテ本邦總產出額ニ對シ僅カニ二分三厘ヲ占ムルニ過キス、只同四十年ニ於ケル九州ノ銀ハ特別ノ事情ノ下ニ減セルモノニシテ其前年ニ於

テハ本邦總產出ニ對シ五分一厘ヲ占ム、更ニ湖リテ每五箇年ニ於ケル其比率ヲ檢スレハ明治三十五年ニハ三分三厘、同三十年ニハ二分四厘、同二十五年ニハ一分五厘、同二十年ニハ八厘、同十五年ニハ一分一厘ヲ占メ、金ニ比シ其比率甚タ低ク凡ソ其十分ノ一乃至十五分ノ一ノ割合ニアリ、蓋シ九州ニ於ケル金銀ノ產出額ハ明治ノ初年ニ於テ特ニ著シク減少シタリ、茲ニ之ヲ數字ニ示ス能ハサレトモ維新前特ニ盛況ヲ呈セシ時代ニ於テハ九州ノ金產出額ハ本邦ノ金產出額ニ對シテ多額ノ

比率ヲ占メシコト明カナリ

九州ヨリ産出スル金銀ノ大部分ハ鹿兒島縣ノ所産ニ係リ、隨テ同縣下ノ金銀諸鑛山ノ消長ハ直ニ金銀産出額ニ至大ノ影響ヲ及ホセリ、而シテ是等數多ノ鑛山中特ニ著シク影響ヲ與ヘシ者ハ僅カニ大口、牛尾、山ケ野、芹ケ野、鹿籠、辨財天、生見及阿多等六七ノ鑛山ニ過キス、産出高ハ遙カニ劣ルモ鹿兒島縣ニ次クヲ大分縣及福岡縣トス、大分縣ニ於テハ鯛生野鑛山ノ開發ト共ニ産出額ノ増加セシコト著シ、長崎縣ニアリテハ金ハ全ク波佐見鑛山ノ所産ニ係リ、銀モ亦同鑛山ノ開發ニ依テ著シク産出ヲ増加シタリ

明治ノ初年ヨリ今日ニ至ル間ニ於テ金銀ノ産出額ニ影響ヲ及ホセシ主要ナル事項ハ第一砂金、第二廢鑛ノ利用、第三幣制ノ改革、第四青化製煉ノ施行、第五鑛業ノ獎勵、第六一般鑛業ノ發達、第七鑛床ノ富鑛部稼行等ナリトス

鹿兒島地方ニ於ケル砂金ノ源ハ其附近ニ賦存スル金鑛脈ニアリト雖

モ亦往昔稼行セラレタル殘滓中ニ存在セル金粒ノ沈積シタルモノ多  
キニ居レリ、而シテ此等ノ砂金ハ近來漸ク採取シ盡シ頓ニ產出ヲ減シ  
多大ヲ望ム可カラサルカ如シ、又往昔ヨリ堆積セラレタル廢鑛ハ一時  
盛ニ採取セラレテ製煉ニ供セラレ、現時尙一部ニ之ヲ製煉スル所アレ  
トモ殆ント當ニ盡キントシ今後ニ於テ甚タ重要視スヘキモノニ非ル  
ヘシ

幣制ノ改革ハ其當時金銀ノ價格ニ變動ヲ來タシ鑛業ノ發達ニ影響セ  
ルコト大ナリシモ今後ニ於テハ重大ノ關係ヲ及ホスコトナカルヘシ、  
青化製煉ハ其處理ノ比較的簡單ニシテ收利多キヲ以テ數年ニシテ一  
般ニ施行セラル、ニ至リ產出額ニ多大ノ影響ヲ來セリ  
鑛業ノ獎勵ト及一般鑛業發達ノ金銀產出額ニ及ホセル影響ハ蓋シ大  
ナルモノアラン、溝部、星野、芹ヶ野其他ノ地方ニ於テハ小鑛區ハ漸次合  
同稼行セラル、ノ傾向ヲ示シ、現時尙自稼法盛ニ行ハルレトモ次第ニ  
鑛主直轄ノ經營ニ移ラントスルノ趨勢ニアリ、而シテ各鑛山ニ於ケル



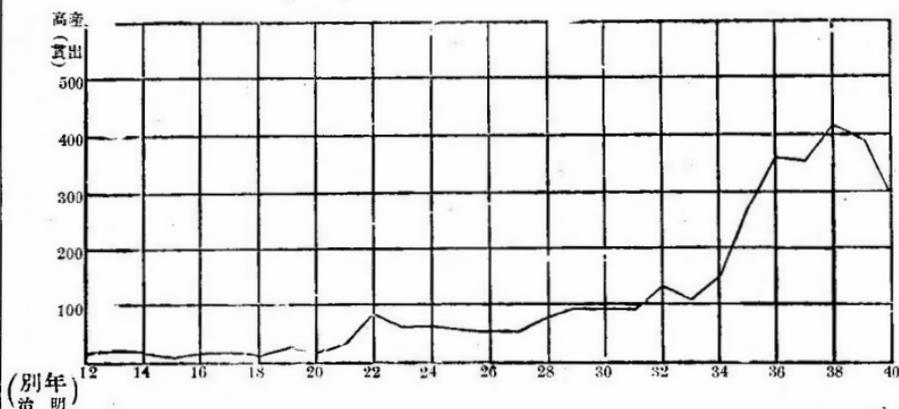
事業ハ擴張セラレ、探鑛ハ銳意各地ニ行ハレ、殊ニ近年規模大ナル製煉工場ノ新設セラル、コト著シ、即チ山ヶ野鑛山ノ製煉場漸ク成ルヲ告ケ、芹ヶ野、三井串木野、筑後及波佐見等諸鑛山ノ如キ或ハ其擴張ノ工程ニ、或ハ其準備中ニアリ

鑛床ノ富鑛部ヲ稼行シテ產出額ヲ増加セルコト著シ、以下金銀產出額ト各鑛山ニ於ケル狀況等ヲ記述シテ鑛業ノ發達ヲ知ルノ一助トナサントス

別表ハ本邦(臺灣、樺太ヲ除ク)及九州金銀累年ノ產出額ヲ示セルモノナリ、第二圖甲ハ九州ノ金ノ累年ノ產出額ヲ、第二圖乙ハ銀ノ累年ノ產出額ヲ曲線ヲ以テ示シ、第三圖ハ主ナル各鑛山ノ位置ヲ示セリ、表中ノ數字ハ主トシテ大日本統計年鑑及農商務統計表ニ據リ、本編記載ノ統計モ主トシテ以上ノ二統計書及本所ノ刊行書、鑛業明細表ヲ參照シ、各鑛山ノ記事ハ主ニ本所在來ノ調査材料ト及本年一二月ノ交踏查セル結果ニ基ツキ編成セルモノナリ

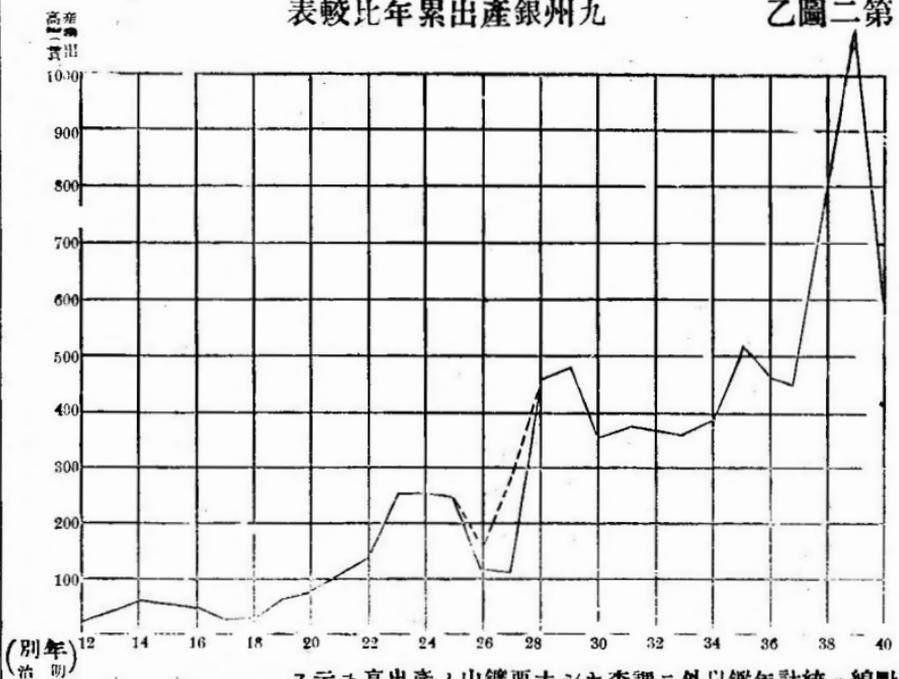
九州産金出累年比較表

第二圖甲

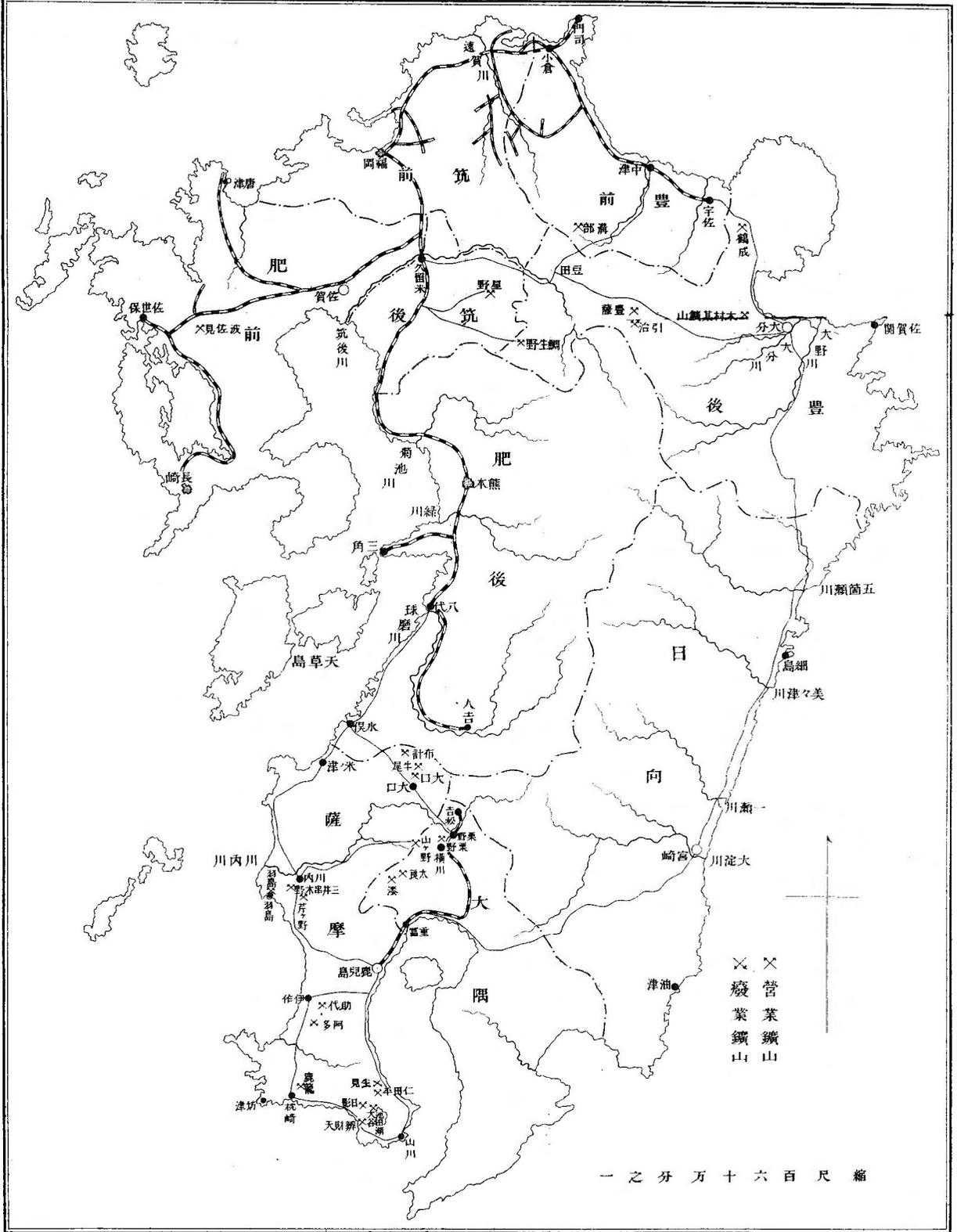


九州産銀出累年比較表

第二圖乙



ス示テ高出産ノ山鑛要主シセ査調ニ外以繼年計統ハ線點



X 營業鑛山  
 X 廢業鑛山

縮尺六百六十分之一

## 一金

明治十二年ニ於ケル九州ノ金産出高ハ僅カニ十一貫餘ニ過キス、爾後明治十七八年ニ至ル間ニハ其産出額ニ多少ノ増減アリシモ著シカラス、同十九年ヨリ同三十四年ニ至ル期間ニハ唯明治二十二年ニ稍著シキ増加アリタルノ外(明治二十二年ノ産出額ハ統計年鑑ニ從ヘハ八十三年餘、鑛業明細表ニ據レハ山金三十八貫餘、砂金十貫餘ナリ)全體トシテ漸次ニ増大セリ、同三十五年以後産出額ハ急激ニ増加シ同年ノ産出額ヲ其前年ニ比スルニ百二十八貫ヲ増シテ殆ト二倍ニ垂ントス、同三十六年ニ於テモ前年ヨリ増加スルコト九十貫ニシテ十年前ニ比シテ六倍半、二十年以前ニ比シテ當ニ二十二倍ニ達セントス、而シテ其産出額ハ明治三十八年ニ於テ最モ多額ニ達シ、同三十九年ニ稍減少シ、同四十年ニハ大ニ減少シテ其前年ノ産出額ヨリ少キコト實ニ百餘貫ナリトス

明治十九年ヨリ同三十四年ニ至ル期間

明治二十二年ニ金產出額ノ特ニ増大シタル原因ハ甚タ明カナラスト雖モ同十九年ヨリ同三十四年ニ亘ル期間ニ產出額漸次増加シタルハ主トシテ廢鑛ノ利用ト及主ニ廢鑛ニ起因セル砂金採取ニアルカ如シ、元本所技師中島博士ノ調査ニ據レハ山ケ野鑛山ノ明治十八九年ノ交ヨリ八九箇年ノ間ニ漸々其產出ヲ増加シタルハ新坑ノ開掘ニヨルニアラス、實ニ其產出額ノ七八割ハ從來ヨリノ廢鑛ヲ採取シ水車ヲ利用シ極メテ廉價ニ之ヨリ採金シタルモノナリ、而シテ山ケ野鑛山ニ倣ヒ芹ケ野鑛山ヲ初メ鹿兒島縣下ノ諸鑛山競テ水車ニヨリ廢鑛ヲ處理スルニ至レリト云フ、蓋シ當時廢鑛ノ利用ハ明カニ金產出額増加ノ一原因タリシヤ必セリ

砂金ノ殆ント全部ハ鹿兒島縣ノ產出ニ係リ、明治十九年ニハ同縣下ニ於テ八貫餘ヲ產セシニ過キサリシモノ漸々増大シテ同二十八年ヨリ同三十四年ニ至ル期間ニハ三四十貫ニ達シ最盛ノ時タリ、同三十六年以後俄カニ減少シテ同三十九年ノ如キハ僅カニ一貫餘ヲ產セルノ

ミ、左ニ山金及砂金産出額ノ比率ヲ示サン爲メ累年統計ヲ掲ケン

明治	山金		砂金	
	産出額	比率	産出額	比率
明治三十九年	三八八、一〇〇 <small>多</small>	一、八九〇 <small>多</small>		
明治三十八年	四一二、五〇九	三、五九五		
明治三十七年	三五〇、二六〇	九、七四七		
明治三十六年	三五四、三七二	一二、七四九		
明治三十五年	二二一、八四一	五四、六四八		
明治三十四年	一二七、七七〇	三〇、五八〇		
明治三十三年	八八、五九八	二九、六二八		
明治三十二年	八二、八一六	四九、一三六		
明治三十一年	五九、六〇〇	三六、九〇六		
明治三十年	五六、三四六	四〇、九六六		
明治二十九年	五三、二七四	三九、〇四三		
明治二十八年	四三、九一九	四一、六一八		
明治二十七年	三五、〇八六	二二、四七一		
明治二十六年	二九、九一六	二五、二〇八		
明治二十五年	三二、二六一	二五、六三九		
明治二十四年	不明	不明		
明治二十三年	不明	不明		
明治二十二年	三八、三二一	一六、三二〇		

明治二十一年	一三、七一—	一三、六七三
明治二十年	不明	不明
明治十九年	一六、二九八	八、六五七
明治十八年	九、四〇五	八八八
明治十七年	不明	不明
明治十六年	不明	不明
明治十五年	七、一〇〇	七八五

此外後章記述スヘキ本邦ノ貨幣制度ノ改革ト一般鑛業ノ趨勢トハ金産出額ニ影響ヲ與ヘタルコト明カナリ、即チ明治三十年本邦ニ金貨本位制度ヲ採用シタルコト、同二十五年以降同三十四五年ニ至ル間ニ特ニ著シク金山ノ數ヲ増加シタルコトハ注意スヘキ事實ナリ

明治三十五年ヨリ同四十年ニ至ル期間

明治三十四五年以降ニ産額ノ著シク増加シタルハ一般ニ各鑛山ノ發展ニ伴ヘル結果ナリトス、而シテ其發展ハ主ニ青化製煉ヲ實施セルニ據レリ、今各鑛山ニ就テ之ヲ見ルニ明治三十五年ノ産出ノ前年ヨリ多キコト牛尾鑛山ニ於テハ三十七貫、大口鑛山ニ於テハ二十三貫、山ヶ野

鑛山ニ於テハ八十三貫(青金)ナリトス、又同三十六年ヲ其前年ニ比スルニ牛尾鑛山ニハ四十八貫、芹ヶ野鑛山ニハ三十貫、鯛生野鑛山ニハ二十一貫ヲ増加産出セリ、蓋シ其增收ハ直接ニ青化製煉ノ實施ト及富鑛部稼行ニ起因セリ

青化製煉ハ明治三十三年牛尾鑛山ニ施行セラレタルヲ本邦ニ於ケル嚆矢ナリトス、爾後該製煉法ハ漸次各鑛山ニ採用セラレ、明治三十七八年頃ニハ既ニ一般ニ行ハレ、自稼人ノ如キモ各小規模ニ之ヲ施行スルニ至レリ、青化製煉ニ關聯シテ搗鑛機械モ亦大ニ改良セラレ、隨テ混汞法ニ據レル金ノ産出モ亦増大シタリ、左ニ主要ナル鑛山ノ青化法ノ試験ニ着手セシ年代ヲ掲ケン

牛尾鑛山	明治三十三年	大口鑛山	明治三十四年
鯛生野鑛山	明治三十四年	星野鑛山地方	明治三十五年
山ヶ野鑛山	明治三十六年	辨財天鑛山	明治三十六年
溝部鑛山	明治三十六年	布計鑛山	明治三十七年

羽島鑛山 明治三十七年 芹ヶ野鑛山 明治三十八年

青化製煉ニヨリ産出額ノ著シク増加シタルハ牛尾鑛山ナリトス、左ニ同鑛山累年ノ産出額、青化製煉ヨリノ産出額及鑛石ノ品位ヲ示サン、即チ該表ニ據テ見ルニ其青化法ヨリノ産出額ハ多量ニシテ特ニ明治三十五年、同三十六年ニ著シキヲ知ルヘシ、青化法ニ關聯シテ搗鑛機械ヲモ増加シ明治三十五年ニハ從來使用セルモノ、外鐵製重量五百封度ノ杵十五本ヲ、同三十七年ニハ八百五十封度ノ者二十本ヲ増シテ噸ニ搗鑛高ヲ増加セリ

明治四十年	明治三十九年	明治三十八年	明治三十七年	明治三十六年	明治三十五年	明治三十四年
七九、三八五 <small>タ</small>	八〇、三九六	一二三、一四五	一一七、二九二	一二四、二〇六	七五、七五六	三八、〇二九
三〇、一一三 <small>タ</small>	六二、一五五	八七、〇五六	八五、九四五	八四、五六二	五九、三四八	一一、九一五
〇〇、一三	〇〇、一六	〇〇、二四	〇〇、二六	〇〇、四四	〇〇、六四	〇〇、一七
鑛石ノ品位						
青化製煉ヨリノ産出高						
金産額						

混赤法  
實收率

明治三十三年	二〇、五六五	三一五	〇〇一	(混永法) 實收率
明治三十二年	一二、二六五		〇〇〇九	(混永法) 實收率
明治三十一年	二、六九九		〇〇〇二	(混永法) 實收率

大口鑛山ニ於テモ亦青化製煉ノ影響著シキモノアリ、明治三十四年ニ同法ノ試験ニ着手シ、翌三十五年ニハ其規模ヲ擴張シテ汽力搗鑛場ヲ設置シ木製ノ杵ヲ廢シテ鐵製トナシ重量四百封度ノ者四十本ヲ使用シ、大ナル青化溶解槽ヲ増置スルニ至リ同年ノ產出激増シタリ、羽島鑛山ニ於テモ明治三十七年以來青化製煉ノ設備ヲ整へ多量ノ產出ヲ見ルニ至レリ、其他ノ鑛山ニ於テハ悉ク之ヲ數字上ニ現ハスコトヲ得サレトモ直接間接ニ同製煉法ノ其產出額ニ及ホセル影響少カラス

明治三十五年以後ニ於テ鑛床ノ富鑛部ヲ稼行セシコトハ牛尾鑛山ニ於テ最モ著シク、即チ前表ニ示セル同鑛山鑛石ノ品位ヲ見ルニ明治三十五年、同三十六年ニ於テ最モ良好ナルヲ知ル、蓋シ當時經濟上其他種々ノ關係ヨリ特ニ富鑛部ヲ稼行セシモノニシテ青化製煉ト相待ツテ

其產出額激増ノ素因ヲナセリ、而シテ大口鑛山モ亦牛尾鑛山ト同シク青化製煉ノ施行ト鑛石ノ品位良好ナリシトニヨリ其產出額著シク増加シタリ、漆鑛山ニ於テモ鑛床ノ富鑛部ヲ稼行シテ其產出額ヲ増加シタリ

鯛生野鑛山ハ明治三十五年ニ至リ鑛石ノ品位貧劣トナリ前年ニ比シテ著シク產額ヲ減少シタリ、然レトモ同年新ニ良好ナル鑛脈ヲ發見シ翌三十六年ニハ著シク其產出額ヲ増加シタリ、山ケ野鑛山ノ明治三十五年、芹ケ野鑛山ノ同三十六年ニ於ケル產出額ノ増加ハ共ニ青化製煉ノ結果ニアラサルコト明ナリ、或ハ富鑛部ノ稼行ニ基因セルカ如キモ之ヲ詳ニセス、只山ケ野鑛山ニ於テハ明治三十五年ニ自稼人ノ稼行スル水車混汞製煉ヨリ三十二貫ノ青金ヲ、直轄經營ノ混汞製煉ヨリ四十一貫ノ青金ヲ其前年ヨリ增收シタルヲ見ル

明治三十九年ニ於テ產出額ノ減少セルハ牛尾鑛山ニ於テ前年ヨリ四十二貫ノ減收ナリシヲ主ナル原因ナリトス、是レ同鑛山ニ於テ鑛石ノ

品位漸ク貧劣トナレルト及動力ノ變更並ニ鑛床ノ下底部稼行ノ設備  
其他種々ノ事情アリシニヨル、明治四十年ニ於テ產出ノ大ニ減セシハ  
主要ナル鑛山例ヘハ牛尾、大口、山ヶ野及波佐見等諸鑛山ノ事業擴張中  
ニ屬セルカ爲ナリ

## 二 銀

明治十二年ニ於ケル九州ノ銀ノ產出額ハ僅カニ二千三貫ニ過キス、爾  
後數年間ハ著シキ増減ナカリシモ同二十一年ヨリ二十九年ニ至ル間  
ニ著シキ増加ヲ示セリ、就中明治二十三年ニハ前年ニ比シ其増加甚シ  
ク、同二十六年及同二十七年ニハ之ニ反シ大ニ減少セリ、更ニ明治三十  
年ニハ著シク減少シ、爾後一般ニ減收ノ傾向アリシモ同三十五年ニ至  
リ漸ク挽回ノ機運ニ會シ明治三十八年及同三十九年ニハ其増加特ニ  
著シ、即チ明治三十九年ノ產出額ヲ以テ十年以前ニ比スレハ二倍餘、二  
十年以前ニ比スレハ十六倍ニ達セリ、而シテ明治四十年ニ及テ產出額  
ノ減少セシコト著シ

明治二十一年ヨリ同二十九年ニ至ル期間

明治二十三年ニ銀產出額ノ著シク増加セルノ原因ハ之ヲ詳ニセスト  
雖モ明治二十一年以降ニ於ケル増加額ハ廢鑛利用ノ結果金產出額ノ  
増加ニ伴ヘル自然ノ增收ト、及此時期ニ二三ノ銀山ノ繁盛ヲ極メタル  
トニアリ、即チ此期間ノ初メニアリテハ銀產出額ノ七八割ハ薩摩國伊  
作地方ノ助代鑛山及伊作鑛山ノ產出ニ係レリ、明治二十五年ノ頃ヨリ  
ハ阿多鑛山ニ於テ多量ノ產出アリ、次テ生見鑛山發見セラレ、明治二十  
七八年ノ交特ニ繁榮ヲ極メ全產出額ノ七八割ヲ產セリ、蓋シ是等諸鑛  
山ニ於テハ鑛石ハ其品位比較的良好ニシテ且ツ鑛床ノ上部ノミヲ稼  
行シ得タルコト及銀製煉法ノ漸次改善セラレタルコト等ハ注意スヘ  
キコトナリトス、統計年鑑及農商務統計表ニヨレハ明治二十六年及同  
二十七年ノ銀產出額ハ著シク減少シ、同二十六年ハ同二十五年ヨリ百  
四十貫、同二十七年ハ同二十八年ヨリ三百五十貫減少セリ、而シテ鑛業  
明細表、鑛山統計便覽、地質要報、地質説明書及大阪造幣局報告等ニヨリ

ヲ調査スルニ主要ナル鑛山即チ山ヶ野、芹ヶ野、鹿籠、阿多及助代ノ諸鑛山ノ產出額ハ同二十六年ニハ百四十八貫八百三匁ナリ、同二十七年ニハ山ヶ野、芹ヶ野、鹿籠、薩摩山、太良、阿多、助代及生見等ノ諸鑛山ヨリ二百八十三貫九百三十二匁ヲ產シ、同二十五年及同二十八年ノ兩年ニ比シ甚タシキ減收ニアラサルカ如シ、然レトモ此兩年ニハ銀ヲ主產スル鑛山即チ阿多鑛山ニ於テハ同二十六年ノ產出額前年ニ比シ約六十貫ヲ減シ、同二十七年ニハ翌二十八年ニ比シ生見鑛山ニ於テ二百三十八貫、阿多鑛山ニ於テ四十六貫、助代鑛山ニ於テ六十九貫ヲ減收セリ

明治三十年ヨリ同三十四年ニ至ル期間

明治三十年本邦ハ金貨本位制ヲ採用セリ、爲メニ銀價ハ下落シ隨テ收支相償ハスシテ小銀山ノ休業スルモノ多ク產出額大ニ減少スルニ至レリ、而シテ九州ニ於ケル產出額モ亦明治三十年及其以後ニ於テ減少シ金產出額ノ漸次増加セル趨勢ト著シキ對照ヲ示セリ、左ニ其前後ニ於ケル金銀ノ價格ヲ示サン

	明治三十五年	明治三十四年	明治三十三年	明治三十二年	明治三十一年	明治三十年	明治二十九年	明治二十八年	明治二十七年	明治二十六年	明治二十五年	
金	一匁ノ價格	五、〇〇錢	五、〇〇	四、九九	四、九六	四、九七	四、九八	四、五九	四、七五	四、六八	四、〇二	三、五一
	百匁ノ價格	一二、六一錢	一四、五〇	一四、九二	一四、三五	一三、九四	一四、三八	一五、二〇	一五、二〇	一五、二〇	一五、二〇	一五、二〇

更ニ各鑛山ニ就テ產出額ノ著シク増減セルモノヲ舉クレハ明治二十年迄六十貫餘ヲ產出セシ助代鑛山ハ同三十年以後ニハ僅カニ二貫餘ヲ產スルニ止マリ、阿多鑛山ハ明治二十九年ニ六十五貫ヲ產セシモ同三十年ニハ復タ多量ノ產出ヲ見ス、生見鑛山ノ產出額ハ明治三十年ニ於テハ其前年ヨリ五十五貫ヲ減セリ

明治三十年以後銀產出額減少ノ時期ニ於テ生見鑛山獨リ繁盛ヲ極メ、  
穎娃、辨財天兩鑛山ノ盛大ニ赴ケルアリテ其產出額ト共ニ全產出額ノ  
八九割ヲ占ムルニ至レリ、而シテ此等鑛山ニ於ケル鑛石ハ品位殊ニ良  
好ニシテ實收率千分ノ二以上時ニ百分臺ニ達セルコトアリ

明治三十五年ヨリ同四十年ニ至ル期間

明治三十五年以來銀產出額ノ稍挽回ノ機運ニ向ヒタルハ青化製煉ニ  
ヨリ金產出額ノ増加ニ伴ヘル自然ノ增收多キニ居ル、而シテ特ニ明治  
三十八年及同三十九年ニ著シク激增シタリ、即チ明治三十八年ハ其前  
年ニ比シ三百五十四貫、同三十九年ハ其前年ニ比シ二百八十六貫ヲ增  
加シ、內辨財天鑛山ノ增收其過半ヲ占ム、即チ同鑛山ニ於テハ明治三十  
八年ニハ前年ニ比シ二百六十一貫ヲ、同三十九年ニハ前年ニ比シ百六  
十貫ヲ增收シタリ

辨財天鑛山ノ產額ハ鑛業明細表、農商務統計表ト本所調査材料ト著シ  
キ相違アリ、而シテ金銀鑛產稅ノ免除セラレタルハ明治三十八年ナリ

トス、蓋シ本山ニ於テハ同三十六年ニハ千貫以上ノ銀ヲ產出セルモノ、如ク其前後兩年ニ比シ著シキ増額ナリ、是レ同年ニハ鑽石ノ品位特ニ良好ナリシト及青化製煉ノ實施セラレシ結果ナルヘシ  
 芹ヶ野鑛山ニ於ケル明治三十八九年ノ銀ノ增收稍著シ、即チ青化製煉ノ結果ナリトス、山ヶ野及芹ヶ野鑛山ニ於テ精煉シタル青金ハ從來金銀ノ比金六分、銀四分ナリシモ鑛石ハ比較的多量ニ銀ヲ含有セリ、隨テ青化法施行以來銀ノ集收率増加シ銀ノ產出額増加スルニ至レリ、今青化製煉ヨリセル兩鑛山ノ金銀產出高ヲ示セハ次ノ如シ

山ヶ野鑛山		金		銀	
明治	四十年	六、一三一 <small>匁</small>	二五、三八〇 <small>匁</small>		
同	三十九年	七、一〇五	三三、五四二		
同	三十八年	六、二三六	二九、二六二		
同	三十七年	四、二〇三	三一、五三二		
同	三十六年	六七九	六、六六〇		
芹ヶ野鑛山	金	八、六六三 <small>匁</small>	七三、九三五 <small>匁</small>		
明治	四十年				

同	三十九年	七、七二五	六五、六三八
同	三十八年	二、六〇〇	一九、四六五

明治四十年ニ銀產出額ノ著シク減少セルハ同年ニ於テ主要ナル金銀山皆擴張工事中ニアルト及辨財天鑛山ニ於テ原動機破損ノ爲メ四箇月間事業ヲ休止シ其前年ノ產出額ニ比シ二百六十五貫ヲ減收セシコト等ニ基因セルモノ、如シ

以上ノ外金銀ノ產出額ニ直接間接ニ關係ヲ及セル事項數多アルモ之ヲ具體的ニ指示スルコト困難ナリ、左ニ二三ノ參照スヘキ事實ヲ擧ケ

### 鑛山ノ災害

九州ニ於ケル金銀山ハ其產出額ニ甚シキ影響ヲ及ホスカ如キ重大ナル災害ニ遭遇セス、只出水ノ爲メ又ハ旱魃ノ爲メ水車ノ運轉ニ支障ヲ生シ或ハ鑛業權移動ノ爲メ一時事業ヲ中止シ、爲メニ產出額ニ多少ノ

減少ヲ來セルコトアリ、即チ山ヶ野、芹ヶ野兩鑛山ノ明治三十七年ニ於ケル產出額ノ其前年ニ比シ減少セルハ旱魃ニ基因セリ、同三十八年以來三井鑛山合名會社ハ串木野附近ニ金一箇年約十一貫ヲ產セシ八鑛區ヲ買收シテ串木野鑛山ト命名シ一時採鑛及製煉ヲ中止シタル爲メ產出額ニ多少ノ減少ヲ來セリ

### 一般鑛業ノ發達

一般鑛業ノ發達ノ產出額ニ及ホス影響甚タ大ナルモノアルヘキモ只僅カニ鑛山ノ數ニ就テノミ其一端ヲ窺フヲ得ルノミ、即チ左表ニ明治十五年以來各縣ノ鑛山數ヲ示セリ、該表ニ據ルニ明治二十年ヨリ同三十年ニ至ル間ニハ著シク鑛山ノ數ヲ増シ一般ニ鑛業ノ發達顯著ナルヲ見ル、同三十年以後ニ於テモ漸次其數ヲ増加スルノ趨勢ヲ示セリ、而シテ近年ハ小鑛區ヲ合併シテ事業ヲ經營スルノ傾向ヲ生セシヲ以テ數字上ニ於テハ鑛山ノ數ノ減少セルカ如キモ實際ニ於テ漸次發達ノ境域ニ進メリ

明治三十九年(稼 鑛區數)行	福岡縣	三〇	長崎縣	一	大分縣	二三	佐賀縣	〇	宮崎縣	三	熊本縣	一	鹿兒島縣	一〇五	合計	一六八
同三十五年(同)	二二	一	一〇	二	二	〇	二	〇	一	一三四	一三五	一七	一七一	一三八	一七九	
同三十年(同)	一一	〇	七	一	三	〇	三	〇	三	〇	〇	〇	七八	八八	八九	
同二十五年(全鑛區數)	五	〇	三	〇	三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一一	一一	一一	
同二十年(同)	不明	〇	不明	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
同十五年(同)	二	〇	一	〇	二	〇	二	二	二	二	〇	〇	三	八	八	

## 鑛業ノ獎勵

前後二回ノ戰役ニ際シ官民共ニ金銀ノ供給ハ最モ國家ニ必要ナルコトヲ自覺シタルト共ニ政府ノ當局者ハ文書ニ演說ニ時ニ技術官ヲ派シテ之レカ獎勵ノ道ヲ講セリ、而シテ金銀產出ヲ獎勵スルノ結果明治三十八年三月十八日政府ハ遂ニ其鑛產稅ヲ免除セリ

## 鑛山ノ狀況

九州ニ於ケル金銀產地トシテ鹿兒島縣ニ於テハ大口、布計地方、山ヶ野、漆地方、芹ヶ野、羽島地方、伊作地方、鹿籠地方及池田地方、福岡及大分二縣ニ跨リテハ星野及鯛生野地方、大分縣ニ於テハ玖珠地方及溝部地方、長

崎縣ニ於テ波佐見地方等アリ、此等各地方ノ地質及鑛床ニ就キ概言ス  
レハ金銀共ニ主ニ石英脈中ニ胚胎シ、玖珠地方及溝部地方其他ニ於テ  
粘土鑛中ニ存在スルモノアルモ其產出高ハ全產出額ノ一小部分ニ過  
キス、而シテ金ハ殆ント銀ト隨伴シ所謂自然金トシテ存在ス、銀ハ金ト  
伴フノ外硫化銀トシテ存在スルモノ亦多ケレトモ方鉛鑛ヨリ製出セ  
ラル、モノ極メテ少シ、金銀鑛脈ノ母岩ニハ第三紀ノ時代ニ迸發シタ  
ル輝石安山岩最モ多シトス、即チ大口、芹ケ野、山ケ野、星野、鯛生野及溝部  
地方ノ如キ是ナリ、而シテ山ケ野ニアリテハ鑛脈ハ安山岩ト共ニ第三  
紀頁岩ヲ布計鑛山附近ニアリテハ石英粗面岩ヲモ貫ケリ、第三紀ノ岩  
層ヲ鑛脈ノ母岩トナセル玖珠及波佐見地方ノ如キアリ、池田地方ノ如  
ク第三紀岩層ト共ニ石英粗面岩、粒狀安山岩及角閃石安山岩ヲモ貫ケ  
ルモノアリ、伊作地方ニ於テハ鑛脈ハ中生紀ノ砂岩、粘板岩ノ累層中ニ  
胚胎セラレ、鹿籠地方ニ於テハ中生紀ノ砂岩、粘板岩ノ外第三紀ノ岩層、  
石英斑岩及輝石安山岩ヲモ貫ケリ

## 一 大口及布計地方

位置及沿革 大口及布計地方トハ鹿兒島縣伊佐郡大口、山野等ニ跨レル地方ヲ稱シ、大口、牛尾及布計ノ諸鑛山ヲ包括シ鹿兒島縣下ニ於ケル有數ノ金產地ナリ、此地方ノ鑛業ノ盛大トナレルハ近年ノコトニ屬セリ、明治三十年前後ニアリテハ堂ノ原、山野鑛山等アリシモ布計鑛山最モ盛ニシテ一箇月金五六貫ヲ産セリ、而モ鑛石ノ品位次第ニ貧劣トナリ遂ニ久シカラスシテ衰況ニ陥ルニ至レリ、大口、牛尾ノ兩鑛山ハ共ニ慶長年間ノ發見ニ係リ島津家ノ稼行ニ屬セシモ時ニ興廢アリ、明治維新後島津家ヲ離レ、爾後屢鑛主ノ交迭アリ、其漸ク多量ニ産出スルニ至レルハ明治三十二年頃ナリトス、蓋シ兩鑛山ニ於テハ青化製煉ノ施行ト同時ニ鑛床ノ富鑛部ヲ稼行シ、同三十五年以後特ニ著シク其産額ヲ増大シタリ、而シテ兩鑛山ノ盛況ヲ呈シテヨリ其附近ニハ多數ノ鑛山勃興スルニ至レリ、即チ木ノ氏、押野々、新牛尾、永野、釣芝、札松及奈良野鑛山ノ如キ是ナリ、押野々、新牛尾及永野ノ三鑛山ハ大口及牛尾兩鑛山

ノ鑛先ヲ稼行セントシタルモノニシテ遂ニ盛況ヲ見スシテ廢棄セリ、其他ノ諸鑛山ニ至テハ鑛脈ハ皆稼行ニ堪ユスシテ現時何レモ休廢ス地質及鑛床 本地方ハ輝石安山岩及石英粗面岩ヨリナリ、大口村牛尾、新牛尾鑛山附近ニ於テハ灰石ノ之ヲ被フアリ、大口鑛山事務所ノ西方鳶巢山附近ニハ火山灰ノ堆積スルヲ見ル

鑛床ハ大口地方ニ於テハ石英脈ニシテ輝石安山岩中ニ胚胎セラレ一般ニ北東ヨリ南西ニ亘リ北西ニ四五十度傾斜スルヲ普通トス、大口、牛尾兩鑛山ニ於テ稼行スル一條ノ鑛脈ハ此地方ノ親鑛ニシテ幅四五尺ヨリ十二三尺ニ達ス、其他之ト並行シ脈幅二三尺内外ノモノ數條アリ、布計地方ニ於テハ多數ノ鑛脈アリテ二條ノ石英粗面岩中ニアルモノヲ除ケハ皆輝石安山岩中ニ胚胎セラレ石英若クハ粘土ヨリナル、其幅狭キハ四五寸、廣キハ四五尺ニ達ス、其走向ハ不規則ナルモ北東ヨリ南西ニ走レルモノト之ニ直角ノモノトアリ、傾斜ハ五十度乃至七十度時ニ直角ニ近キモノアリ、石英脈ニアリテハ金ハ通常細粒ノ自然金トシ

テ存在シ金銀ノ比ハ相半ハスルヲ普通トス、粘土脈ニアリテハ金ハ普通銀ヨリ含有率高シ

事業 現時稼行ノ三鑛山中大口、牛尾二鑛山ハ共ニ同一ノ鑛脈ヲ稼行シ、走向ニ沿フテ各千二三百尺、傾斜ニ沿フテ牛尾ハ約五百尺、大口ハ約三百尺ヲ採掘シ盡シ、目下其殘鑛ト及更ニ其下通リトヲ稼行セントシ、現最下底ヨリ五百尺ノ下部マテ掘進スルノ設計ヲナシ現ニ排水ノ設備中ニ屬ス、鑛石ノ品位ハ概言スレハ上部ニ良好ニシテ近時下底ニ進ミ漸ク劣等トナレリ、現最下底ニ於ケル品位ノ如何ハ本山ニ於ケル重要ナル問題タリ、而シテ脈幅ト及走向トニ沿ヒ稼行シ得ル距離ハ下部モ上部ト大差ナシ、現時兩山ニ於ケル鑛石ノ品位ハ凡ソ十萬分ノ一乃至一、六、採掘量約一箇月四十五萬貫ナリ

布計鑛山ニ於テハ概言スレハ鑛石ノ品位ハ鑛床ノ走向及傾斜ノ所々ニ於テ變化甚シク操業ニ一定ノ方針ヲ定ムルコト困難ナルカ如シ、現ニ僅ニ二條ノ鑛脈ヲ採掘スルノミ、明治三十九年製煉工場擴張ノ後稍

面目ヲ一新スルニ至レリ、一日ノ採掘高約二千五六百貫ナリ

製煉 製煉場ノ主ナル設備ハ牛尾鑛山ニ於テハ五百封度ノ鐵杵三十、八百五十封度ノモノ二十本アリ、青化溶解槽二千三百貫入九本、三千六百貫入六本、二百五十貫入八十本アリ、大口鑛山ニハ四百封度ノ鐵杵四十本、八百五十封度ノモノ二十本、青化溶解槽七千貫入十本、二百五十貫入百四十本アリ、布計鑛山ニハ六百封度ノ鐵杵十本、青化溶解槽二千五百貫入三本、三百二十貫入二本アリ

金銀ノ採收率ハ混乘法ニテハ約二割乃至三割、青化法ニテハ約七割乃至八割ナリト云フ

産出額

大口鑛山

年 別	金	銀	製煉元鑛高
明治 四十年	四九、四七三 <small>匁</small>	一九、九三三 <small>匁</small>	六、四九八、二三六 <small>匁</small>
同 三十九年	五六、五一一	二二、五三七	五、八一〇、三五四
同 三十八年	四一、一一四	一八、九一二	三、八八二、四四一
同 三十七年	五八、〇五五	三一、二六一	一、九二六、八八九



布計鑛山

明治四十年	五、二八一	三、三五六	四一、二、六二一
同 三十九年	一九四	一二八	一五、四〇〇
同 三十八年	九五九	五〇二	七六、九五〇
明治三十四年ヨリ同三十七年ニ至ル産出ナシ			
明治三十三年	不 明		
同 三十二年	六七五	二〇八	三六、二八四
同 三十一年	一、七五〇	五三四	一〇六、七六〇
同 三十年	二、九〇〇	五八一	九三、八三〇
同 二十九年	六、九八七	二、二八九	一四五、六九四

二 山ヶ野及漆地方

沿革 山ヶ野鑛山ハ山ヶ野地方ニ於ケル唯一ノ重要ナル鑛山タルト  
 共ニ本邦ニ於テ最モ主要ニシテ最モ古キ歴史ヲ有スル金山ノ一タリ、  
 其發見ハ寛永十七年ナリトス、爾後今日ニ至ル迄時ニ盛衰アリシト雖  
 モ尙連綿トシテ稼行セラレ其産出多大ノ額ニ達セリ、山ヶ野鑛山ヲ除  
 ケハ山ヶ野地方ノ鑛山ハ何レモ近年ノ稼行ニ屬シ、永野鑛山、栗野鑛山  
 ノ如キハ明治二十五六年以後ニ於テ僅ニ金銀ヲ産出セシニ過キス、漆

地方ニアリテハ太良鑛山獨リ二百年前ニ發見稼行セラレシコトアル  
モ遂ニ盛況ヲ呈スルニ至ラス、漆鑛山ハ明治三十年前後ヨリ稍金銀ノ  
產出ヲ増加シタリ、而シテ此地方ニ於テハ特ニ明治三十六七年以後多  
數ノ鑛山ノ勃興セルアルモ何レモ規模小ニシテ產出金一貫ニ達スル  
モノナシ

地質及鑛床 地質ハ輝石安山岩ヨリナル、唯山ケ野ニ於テハ、出來山、夢  
想谷附近ニ於テ第三紀頁岩ノ露出セルアリ、而シテ火山灰此等ノ岩盤  
ヲ被覆セリ、鑛床ハ輝石安山岩中ニ胚胎セル石英脈ナルモ山ケ野ニ於  
テハ頁岩層ヲモ貫通スルヲ見ル

山ケ野地方ニアリテハ鑛脈ハ梨野附近ニアル一二條ノ鑛脈ヲ除ケハ  
皆山ケ野鑛山ニ屬ス、走向ハ一般ニ東西ニ近ク北方ニ急斜スルヲ普通  
トス、漆地方ニアリテハ少シク之ト異リ走向ハ南北ニ近キモノ多ク、傾  
斜ハ通常西方ニ急ナリ

鑛脈ノ數ハ夥多ニシテ山ケ野鑛山ノミニテモ五十條ニ達スト稱セラ

ル、就中晒鑛及高塚鑛ハ此ノ地方ノ親鑛タリ、漆地方ニモ亦數多ノ鑛脈  
アレトモ太良鑛山及漆鑛山ニ稼行セラル、モノヲ主要ナルモノトス、  
金銀産出ノ状態ハ大口、牛尾及芹ヶ野鑛山ニ類似ス、而シテ高塚鑛、晒鑛、  
太良鑛山ニ於ケル鑛脈ハ特ニ黑色粘土様ノ過酸化滿俺ヲ伴フコト著  
シ、鑛石中ニ含有セラル、金銀ノ比率ハ大口、牛尾鑛山ト異ナリ、銀ハ普  
通金ノ六倍乃至八倍ナリ、金粒ハ概シテ大ニシテ肉眼ニテ識別シ得ヘ  
キモノアリ

事業 現時稼行スル鑛山ハ山ヶ野附近ニテハ山ヶ野及永野鑛山、其稍  
北東方ニアリテ米長、栗野鑛山等アリ、永野鑛山ハ山ヶ野鑛山ノ鑛先ヲ  
稼行セシモノニシテ鑛鑛亂レ、殊ニ近年品位劣等トナリ僅ニ自稼人ニ  
委シテ稼行スルノミ、米長鑛山ハ明治四十年ノ創業ニ係リ事業未タ其  
緒ニ就カス、栗野鑛山ハ近ク事業ヲ再興シタルノミナレハ記スルニ足  
ラス、山ヶ野鑛山ニ至リテハ古來自稼法ト本山直營トニヨリ稼行セリ、  
近年事業ノ刷新ト共ニ漸次ニ自稼ヲ直轄經營ニ移スノ方針ナルモ今

尙產出額ノ七八割ハ自稼法ニヨリ產出スルモノナリ、自稼人ハ現今本山ノ諸鑛脈ノ上部ニ於ケル殘鑛ヲ採掘シ、直轄經營ニ於テハ從來主トシテ出來山、晒、濱、高塚、ト入、新三ノ諸鑛ヲ稼行セシモ目下晒、高塚兩鑛ヲ胡摩目、晒、火入及礮山坑ヨリ採掘ス、而シテ此兩鑛ハ今後ニ於テモ亦大ニ稼行セラ、ルモノタリ、以上四坑ノ外目下三番瀧坑開鑿中ニシテ晒鑛、硯鑛其他永野村ニ於ケル本山主要ノ鑛ヲ稼行セントセリ、今日迄晒鑛ニ於テ探鑛セシ距離ハ走向ニ八百尺、傾斜ニ三百七十尺ナリ、脈幅ハ十尺ヨリ二十尺ニ達ス、鑛石ノ品位ハ一定セサレトモ現時金十萬分二乃至百萬分六、銀十萬分六ナリ、高塚鑛ニ關シテハ走向ニ沿ヒ二千四百尺、傾斜ニ向ヒ百尺ヲ探鑛採掘セリ、脈幅ハ四五尺ヨリ二十尺ノ間ニアリ、鑛石ノ品位ハ現時金十萬分一乃至百萬分六、銀ハ金ノ五倍乃至七倍ナリ、本山ニ於ケル一日ノ採掘高ハ胡摩目坑ヨリ約三萬貫、三番瀧坑ヨリ約四千貫、火入坑ヨリ約五千貫ナリトス

製煉　ハ山ケ野鑛山ニ於テハ自稼人ハ專ラ水車搗鑛ニ從事シ、鑛尾ハ

之ヲ鑛主ニ納入ス、現時水車三百四十四臺アリ、直轄事業トシテ山ヶ野  
 搗鑛場ニ八百五十封度ノ鐵杵二十本アリ、一本杉青化製煉工場ニ青化  
 溶解槽八千貫入四本アリ、金銀採收率ハ混汞法ニテ金五割、銀一二割、青  
 化法ニテ金八割二分、銀五割ナリト云フ、永野搗鑛場ハ佛人「ヲジエ」氏ノ  
 設計セシトコロニシテ二百五十封度ノ鐵杵四十本、百封度ノモノ四十  
 本アリ、混汞法ノ採收率金五割、銀一二割ナリト云フ、三番瀧工場ニ於テ  
 ハ八百五十封度ノ鐵杵八十本、青化溶解槽四萬貫入四本、壓瀝機一臺ア  
 リ、採收率ハ混汞、青化兩法ニテ金八割ニシテ銀ハ金ヨリ稍少ナシ

産出額

山ヶ野鑛山

(青金品位ハ金六分、銀四分)

年

別

青

金

明曆二年マヨテ十箇年

二、六一六、五九二、八九

寛文三年マヨテ同

一、一九〇、〇八一、四〇

延寶四年マヨテ同

七八一、一一九、三六

貞享三年マヨテ同

四一二、八四八、〇〇

元祿二年	寶永三年	正徳五年	享保十年	享保十一年	同二保十一年	元文二年	延享二年	延享三年	寶曆五年	寶曆六年	明和三年	安永四年	天明五年	天明六年	天明七年	寛政二年	寛政三年	全化二年	文化三年	文化八年	文政九年	天保六年	
マヨ	マヨ	マヨ	マヨ	マヨ	マヨ	マヨ	マヨ	マヨ	マヨ	マヨ	マヨ	マヨ	マヨ	マヨ	マヨ	マヨ	マヨ	マヨ	マヨ	マヨ	マヨ	マヨ	マヨ
テリ	テリ	テリ	テリ	テリ	テリ	テリ	テリ	テリ	テリ	テリ	テリ	テリ	テリ	テリ	テリ	テリ	テリ	テリ	テリ	テリ	テリ	テリ	テリ
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

二八七、一〇〇、四二  
 二〇一、八一六、二五  
 一三一、〇九八、七〇  
 八五、七四七、九〇  
 六七、七八二、二〇  
 一二五、二三〇、二〇  
 一四五、六八八、三〇  
 一二八、七一七、五〇  
 八〇、三五七、〇〇  
 六九、八四九、四〇  
 一四八、〇三一、七〇  
 九〇、三二五、二五  
 六二、五四八、二五  
 五七、三三九、五〇





明治	三十六年	一七八、四五〇、一〇 <sup>知</sup>	内自稼一〇三、一七二、七〇 <sup>知</sup>
同	三十七年	一七一、〇九一、三〇	内自稼九〇、九七二、〇〇
同	三十八年	一九七、二四二、二九	内自稼一二一、四三五、七三
同	三十九年	一八八、五七五、二〇	内自稼一〇九、四三〇、三〇
同	四十年	一四五、七八七、一〇	内自稼八三、六〇五、六〇

計 九千四拾六貫貳百九拾七匁八分四厘

漆地方ニアリテハ漆鑛山近年稍盛況ヲ呈セリ、同山ニ於テハ鑛脈二條アリ、一ハ幅一二尺、一ハ四五寸乃至四五尺ニ達ス、現今ハ只後者ヲ稼行スルノミ、明治三十九年ヨリ同四十年ノ初期ニ亘リテ良好ナル鑛石ヲ産シ、明治四十年ノ産出額金十二貫百十一匁、銀二十八貫二百七十匁ニ達センモ今ヤ富鑛部ハ採取シ盡シタリ、太良鑛山ニ於テハ鑛脈ノ數數多アリテ幅五尺以上ニ達スル者三條アリ、然レトモ鑛石貧劣ナルカ如ク現時僅ニ自稼人ノ只一鑛ヲ稼行スルニ過キス、鑛幅ハ平均十二三尺ナリ、鑛石ハ芹ヶ野、山ヶ野鑛山ノモノニ類似シ尙探鑛スヘキ價值アリ、其他ノ諸鑛山ハ何レモ自稼法ニヨリ小規模ニ操業スルニ過キス、鑛脈

モ未タ注意スヘキモノヲ發見セス

產出額

漆鑛山

(一ハ產出ナキヲ示ス)

年別	金	銀	製煉元鑛高
明治四十一年	一、二、一、一 <small>タ</small>	二八、二七〇 <small>タ</small>	四二七、一〇〇 <small>タ</small>
同 三十九年	一、一、五八	七四二	一、〇一八、〇〇〇
同 三十八年	二九八	二〇八	四三、〇〇〇
同 三十七年	二一〇	一四〇	三三、〇〇〇
同 三十六年	三七七	二〇三	三五、〇〇〇
同 三十五年	二七三	一八三	三五、〇〇〇
明治三十二年ヨリ同三十四年ニ至ル產出額不明			
明治三十一年	一	一	一、一六〇
同 三十年	九四	一二二	八、八〇〇
同 二十九年	一七二	一四〇	一〇、〇七〇

太良鑛山

年別	金	銀	製煉元鑛高
明治四十年	不明	不明	不明
同 三十九年	二、〇七〇	八、七六七	二四一、九七一

明治三十八年	七四六	一、四四一	八九、八〇〇
同 三十七年	一二四	四九二	一三、一〇〇
同 三十六年	一六	一二〇	五、〇〇〇
同 三十五年	四七	三〇〇	九、五五〇
同 三十四年	一	一	
明治三十二年及同三十三年ハ産出額不明			
明治三十一年	八六	六二四	二八、三〇〇
同 三十年	一七三	一、二四八	五六、六〇〇
同 二十九年	一、一七四	二、七四一	一三〇、五四〇
同 二十八年	一、四〇四	二、二四九	不明
同 二十七年	一、三五二	一、九二七	不明

### 三 芹ヶ野及羽島地方

沿革 此地方ノ鑛山ハ山ヶ野地方ニ次テ開發セラレ、芹ヶ野鑛山ノ如キハ萬治三年ニ、羽島鑛山モ亦同時代ニ發見セラレ共ニ島津家ニ依テ稼行セラレタリ、爾後時ニ事業ヲ中止セシコトアリシモ山ヶ野、鹿籠地方ト相並ヒテ九州ニ於ケル有數ノ金產地タリ、西山、角石兩鑛山ハ永祿年前ニ發見セラレタレトモ其沿革ヲ詳ニセス、明治十八九年ノ交ヨリ

鑛業ハ一般ニ盛況ヲ呈シ同三十年前後ニ於テハ殊ニ著シク鑛山ノ數增加シタリ、然レトモ皆小規模ニシテ芹ヶ野鑛山ノ鑛床ノ鑛先及西山鑛ヲ分割稼行シタルモノナリ、現時此地方鑛山ノ大部ハ芹ヶ野、三井串木野兩鑛山ニ合同經營セラル、ニ至レリ

地質及鑛床 地質ハ輝石安山岩ヨリナリ又其集塊岩アリ、羽島村落附近、芹ヶ野ニ於ケル金山川ノ邊緣ニ沿ヒ洪積層アリ

數多ノ鑛脈ハ何レモ輝石安山岩中ニ胚胎セル石英脈ニシテ互ニ並走ス、其一般走向ハ芹ヶ野ニアリテハ北東ヨリ南西ニ亘リ、羽島ニアリテハ之ヨリモ稍東西ニ近シ、傾斜ハ羽島ニ於ケル一二條ノ鑛脈ヲ除ケハ皆南東方ニ急斜ス、鑛脈ノ數ハ明カナラサレトモ芹ヶ野ニ於ケル六條ト、羽島ニ於ケル七條トハ主ナルモノナリ、中芹ヶ野ニ於ケル西山、向田梅鑛、羽島ニ於ケル坂ノ下、小仁田ノ諸鑛ハ特ニ主要ナリ、脈幅ハ平均四五尺ナルモ十尺ヨリ八十尺ニ達スルモノアリ、鑛石ハ一般ニ銀ニ富ミ金ノ七倍乃至八倍ヲ含有スルコト芹ヶ野鑛山ノ高塚及晒鑛ニ相同シ

ク、金銀產出ノ狀態モ亦略是等ノ鑛山ニ同シ、而シテ鑛石中過酸化滿俺  
ヲ含有スルコト多クシテ黑色トナレルコト屢ナリ  
事業 島津家ノ稼行スル芹ヶ野鑛山ニアリテハ從來ノ鑛區ノ外明治  
四十年ニハ火立ヶ岡及薩摩山鑛山ヲ買收セリ、鑛業ハ古來ヨリ自稼人  
ニ採掘及製煉ノ一部若クハ全部ヲ稼行セシメタリシモ明治三十八年  
以來自稼人ノ稼行セシ事業ノ一部ヲ本山ノ直營トナセリ、現時自稼人  
ハ天狗、向田、梅及八木鑛ヲ採掘シ十里塚坑道ノ水準以上ヲノミ稼行ス  
ルヲ許ザレ、直營ニアリテハ現時自稼人ヨリ納付スル鑛尾ヲ青化製煉  
ニヨリ金銀ヲ收取スルコト、及採鑛ナリトス、採鑛ニアリテハ舊坑道  
ニ沿ヒテ掘進シ專ラ下通りヲ稼行セントス、而シテ十里塚坑ニ於テハ  
已ニ三四ノ鑛脈ニ會セシモ未タ稼行セスシテ專ラ掘進シテ梅鑛ニ達  
セシトス、姥坑ニ於テハ向田鑛ニ會シ之ニ沿ヒ約五百四十尺稼行シ尙  
掘進中ナリ、六番坑第一坑ニ於テハ向田鑛ニ沿ヒ七百尺掘進シ、第二坑  
ニ於テハ走向ニ沿ヒテ梅鑛ヲ千百尺、八木鑛ヲ二百五十尺稼行セリ、大

通洞坑ハ未タ鑛脈ニ會セサレトモ本山主要ノ鑛脈ノ集合セル小迫ニ  
向ヒ掘進ス

自稼人ハ水車二百十三臺ニヨリ搗鑛混汞製煉ヲナシ其採收率二三割  
ナリ、直營工場ニハ水車四臺アリ、青化製煉ノ設備未タ完カラサルモ自  
稼人ヨリ收ムル鑛尾ヲ處理ス、而シテ目下工事中ノ工場竣成セハ一日  
五十噸ノ鑛石ヲ處理スル豫定ナリト云フ

三井串木野鑛山ハ明治三十八年以來三井鑛山合名會社ノ順次八鑛區  
ヲ買收合併シタルモノナリ、即チ明治三十八年度ニハ井上某及長某ノ  
芹ヶ野鑛山ヲ、同三十九年度ニハ角鐵、日新、十里塚、芹ヶ野、西山、薩摩及西  
山、白木、芹ヶ野、茅野鑛山ヲ買收シタリ、而シテ是等ノ諸鑛山ハ何レモ西  
山鑛ヲ分割稼行シ來レルモノト、島津家ノ芹ヶ野鑛山ノ鑛先ヲ稼行セ  
ルモノニシテ何レモ自稼ニ或ハ直轄ニ稼行シ來レリ、而シテ合併後ハ  
專ラ西山鑛ノ探鑛ニノミ從事シ及其鑛石ノ製煉ノ試驗ヲ施行スルニ  
止マレリ、探鑛ハ主トシテ舊坑道ヲ擴大シツ、掘進シ現疏水坑道以上

ヲ探鑛ス、然レトモ操業日尙淺ク、脈幅大ニシテ未タ其兩盤ヲ檢スルニ至ラス、今日迄探知セル區域ハ走向ニ沿フテハ東、藤澤坑ヨリ西、舊疏水坑北西ノ一坑ニ至ル約四千尺、傾斜ニ沿フテハ長坑準ヨリ疏水坑準ニ至ル約百尺ナリ、鑛石ノ品位ハ不規則ニシテ富鑛部ハ全脈幅中ニ帶狀ヲナシ、概シテ長平坑以西ハ以東ニ比シテ品位劣レリ、傾斜ニ沿フテハ探求更ニ不充分ナルモ品位及脈幅ニ於テ大ナル差ナキカ如シ、方解石ノ脈ハ時ニ甚タ厚ク十尺以上ニ達スルコトアリ、即チ本山ニ於テハ走向ニ六千尺、傾斜ニ千尺ハ稼行ニ堪フヘク、脈幅ハ平均八尺、品位ハ金百萬分九ナリト稱ス

羽島鑛山ニアリテハ明治三十七年製煉工場擴張ト同時ニ漸ク盛況ヲ呈シタリシモ、同四十年ノ末火災ノ爲メ其工場燒失シ復タ振ハス、此地方ニ於ケル主要ナル鑛脈ハ悉ク本山ノ鑛區ニ存スレトモ本山ニ於テハ主ニ坂ノ下、小仁田兩鑛ヲ稼行ス、中、鶴鑛ハ往昔稼行セラレタリト云ヒ、其他ノ鑛脈ハ未タ一モ着手セラレタルモノナシ、坂ノ下鑛ハ脈幅六

七尺ヨリ十四五尺ニ達シ一般ニ鑛脈ノ性質芹ヶ野ニ於ケル西山、向田及梅鑛ニ類ス、而シテ本脈ハ尙上部稼行ニ充分ノ餘地アリテ探鑛ヲ專ラニスルコト急務ナルヘシ、小仁田鑛ハ四五年以前ヨリ探掘セラレタレトモ明治四十年ニ事業ノ一頓挫ヲ來セシト共ニ探掘ヲ休止セリ、現時ハ光瀨鑛ヲ自稼ニ委シ、坂ノ下鑛ヲ僅ニ五六人ニテ探掘スルニ過キス、隨テ木製水車二三臺ヲ以テ僅ニ製煉ニ從事スルノミ

以上三鑛山ノ外之ニ接シテ小鑛山數多アルモ興廢常ナテス、中ニ就テ三井、島津兩鑛區ノ中間ニ介在シテ天狗鑛ノ西部ヲ稼行スル薩摩山鑛山及荒川谷ノ上流草良村附近ニ石英脈ト粘土鑛トヲ稼行スル荒川鑛山ハ稍盛ニ稼行セラレ、前者ハ一箇年、金一貫四五百匁、銀二三貫ヲ、後者ハ明治四十年ニ四五貫ノ青金ヲ製出シタリ

產出額

島津家所有ニ係ル芹ヶ野鑛山、現時三井家ノ所有ニ歸セシ各鑛山及羽島鑛山ノ產出額ヲ左表ニ掲ク

芹ヶ野鑛山（括弧内ノ數字ハ大阪造幣局ノ報告ニヨル）

年 別

金

銀

製煉元鑛高

明治二十三年及同二十四年ノ產出額不明			
明治二十二年	九、六六七	九、五一六	二三四、九〇〇
同	二八、七二二 <small>外</small>	一〇〇、四一九 <small>外</small>	二、一八八、六八九 <small>實</small>
同	三六、三四〇	九九、五一八	二、四八四、二〇二
同	三五、六二四	五六、二六九	二、七三五、五三四
同	二五、一一四	二九、二四〇	一、八四三、五九八
同	三四、〇一七	三九、七四一	二、五二六、三四〇
同	三、九〇〇	一五、六〇一	六三〇、三六九
同	四、一六四	一二、四九二	五〇七、二二八
同	三、〇七三 <small>外</small> （二一、二九二 <small>外</small> ）	七、一七一 <small>外</small> （二二、五三八 <small>外</small> ）	四六七、九二六
同	三、三一三（二一、六七七）	七、七三〇（二三、六四三）	四八六、九二二
同	三、五六八（二四、二一四）	八、三二七（二八、八八九）	五三八、〇〇〇
同	三、三二六（一八、五〇二）	八、九九六（二四、〇二三）	五九四、〇〇〇
同	三、七一（二三、二六二）	九、九八三（二九、六九一）	六四二、〇〇〇
同	三、五六四（二二、一四九）	九、六六六（二八、二九四）	不明
同	三、三五〇（一三、〇九一）	五、二七三（一七、三一二）	同
同	五、三五〇（一〇、六一一）	七、八五〇（一四、四〇七）	同
同	（一〇、三八二）	（一四、三九四）	同

明治二十一年

一、八六五

一六、七八

二一六、二七〇

(本山ニテ調査セシ各年度間ノ總計産出額)

元 治 年 間	五〇六 <small>欠</small>	(青金)
慶 應 年 間	六七	(同)
自明治元年至同十年	七一、六〇一	(同)
自明治十一年至同二十年	六九、四五七	(同)
自明治二十一年至同三十年	二八〇、八六五	(同)
自同三十一年至同四十年九月	七八〇、四九八	(同)

舊火立ヶ岡鑛山

年 別	金	銀	製煉元鑛高
明 治 四 十 年	—	—	—
同 三 十 九 年	四八一	七八四 <small>欠</small>	八六、四六一 <small>其</small>
同 三 十 八 年	九〇八	一、二九二	四二三、一〇四
同 三 十 七 年	六〇四	—	一二三、三一五

舊薩摩山鑛山

明 治 三 十 九 年	五六	四五九	一〇、一〇〇
同 三 十 八 年	三八	二六九	五、五七〇

同	三十七年		二二		一五三		四、六〇〇
明治三十二年ヨリ同三十六年ニ至ル産出額不明							
明	治	三十一	年	四三		八二	一六、五〇〇
同		三	十	年	五二	一〇〇	一七、二五〇
同		二	十九	年	五一	九九	一六、九〇〇

三井串木野鑛山

舊井上某芹ヶ野鑛山

年	別	金	銀	製煉元鑛高			
明	治	三十八	年	一四二 <small>匁</small>	三二三 <small>匁</small>	五七、〇〇〇 <small>匁</small>	
同		三十七	年	一二七	三〇〇	六〇、〇〇〇	
同		三十六	年	二四八	九六〇	一一、〇〇〇	
同		三十五	年	一三七	三五二	五〇、〇〇〇	
同		三十四	年	一二七	三〇二	四五、〇〇〇	
明治三十二年及同三十三年ハ産出額不明							
明	治	三十	一	年	一七五	三三二	四六、九五〇
同		三十	年	二二八	三八一	五〇、三五〇	
同		二十九	年	二二六	三八七	五〇、〇〇六	

舊角鐵鑛山

明	治	三十九	年	一、九八四	一三、三九〇	二六五、七四〇
---	---	-----	---	-------	--------	---------

明治	三十八年	二、六一九	一五、二九三	五二、三〇〇
同	三十七年	一、三一四	八、六六四	二二、一六〇〇
同	三十六年	六三〇	二、一二三	一六二、八〇〇
同	三十五年	六二九	二、〇〇〇	一六二、八〇〇
同	三十四年	六二五	一、九三四	一五八、四〇〇
同	三十三年	六三三	一、八〇四	二五八、四〇〇
同	三十二年	六三〇	一、五四〇	一四〇、八〇〇
同	三十一年	五九一	不明	不明
同	三十年	五八九	一、二四五	一一八、八〇〇

(以下角石鑛山時代ノ産出額)

明治	二十九年	五八七	一、〇八四	一〇八、〇〇〇
同	二十八年	五八三	一、〇二八	不明
同	二十七年	一三八	二四五	同
明治二十三年ヨリ同二十六年ニ至ル産出額不明				
明治	二十二年	二四	四九	不明

舊長某芹ヶ野鑛山

明治	三十八年	九四四	一、九二九	一八〇、二〇〇
同	三十七年	五九八	一、二七六	一五四、〇〇〇

明治三十六年	四〇二	六六八	四八、〇〇〇
同 三十五年	二一八	三三二	三二、〇〇〇
同 三十四年	一九二	二七五	二七、〇〇〇
明治三十二年及同三十三年ハ産出額不明			
明治三十一年	二〇四	二七八	二四、〇〇〇
同 三十年	二五五	三四八	不明
同 二十九年	四二五	五八〇	五〇、〇〇〇

舊日新鑛山

明治三十九年	五一四	一、六八五	七三、四三〇
同 三十八年	角鐵鑛山ト合同		
同 三十七年	一八四	五八五	八七、八〇〇
同 三十六年	一七八	五六六	八八、〇〇〇
同 三十五年	一八六	五九五	九二、四〇〇
同 三十四年	一七六	五〇一	八八、〇〇〇

舊十里塚鑛山

明治三十九年	二二九	六五八	七四、一七五
同 三十八年	二、一三二	五、三五八	五二四、六一二

舊芹ヶ野、西山鑛山

明治三十七年	同	九七	一一九	一〇、二九二
明治三十六年	同	一〇四	二二三	一三、九四五
明治三十五年	同	一〇五	二二四	一四、〇〇〇
明治三十四年	同	一二九	一六九	一七、〇〇〇
明治三十二年及同三十三年、産出額不明				
明治三十一年	同	一三五	一五一	二五、六〇〇
明治三十年	同	二一八	二五二	四一、〇〇〇
明治二十九年	同	五五	六九	一〇、一〇〇
明治三十九年	同	四〇八	九二八	一一五、八六〇
明治三十八年	同	四七九	一、三三四	一五四、七六〇
明治三十七年	同	三八七	九一四	一三六、三〇〇
明治三十六年	同	一一五	六八〇	四二、七〇〇
明治三十五年	同	六六	三七四	二七、五〇〇
明治三十四年	同	六七	三七六	二七、六〇〇
明治三十三年	同	八五六	一二五	九七、二五〇
明治三十二年	同	不明		
明治三十一年	同	一二九	七三一	五七、七九五
明治三十年	同	一三一	七四一	五四、五〇五
明治二十九年	同	一三五	七六〇	五五、九二〇

舊薩摩鑛山

明治	三十九年	一九五	一、四四四	二五、〇〇〇
同	三十八年	一、四六八	一〇、五九一	七一、〇〇〇
同	三十七年	二、六五〇	一一、二二六	三四七、五三〇
同	三十六年	二、七四一	九、六六五	二六〇、六二〇
同	三十五年	一、五二五	三、六一七	一八五、七〇〇
同	三十四年	七二九	一、五七四	一四五、七〇〇
同	三十三年	一、五三六	二、二九八	二五六、二八四
同	三十二年	一、五六〇	二、二六二	二四九、六二五
同	三十一年	一、五九五		

舊西山、白木、芹ヶ野及茅野鑛山

明治	三十九年	二、三二二	九五、一四	四五六、四〇〇
同	三十八年	三、九九三	一三、三五一	七三五、九七五
同	三十七年	七四八	八〇七	六六、七〇〇
明治三十四年ヨリ同三十六年ニ至ル産出額不明				
明治	三十三年	五四七	七二八	九六、四〇〇
同	三十二年	九一六	一、一八七	一七五、八七五
同	三十一年	一、七七一	二、一六五	二五五、五〇〇

羽島鑛山

明治四十年	五、五〇二	三三、九八四	五八九、七八〇
同三十九年	四、五七一	一九、四六七	一、一九二、〇四七
同三十八年	二、八一六	一四、六四七	六八〇、〇〇〇
同三十七年	—	—	—
明治三十二年ヨリ同三十六年ニ至ル産出額不明			
明治三十一年	一八一	三〇五	二七、五四〇
同三十年	一九七	三二七	二八、九二〇
同二十九年	二九九	二、五〇一	五〇、二〇〇
同二十八年	一四九	不明	不明
同二十七年	五五六	同	同
明治二十三年ヨリ同二十六年ニ至ル産出額不明			
明治二十二年	三、四〇五	四、六五一	七、七〇〇
同二十一年	二、二三八	一、一〇七	一一、九四〇

四 伊作地方

沿革 古來ヨリ著名ノ産金地ニシテ嘗テ盛況ヲ呈シ、就中神殿鑛山ノ如キ往昔最モ繁盛ヲ極メタリト云フ、而モ今ハ其狀況ヲ詳ニセス、明治二十一年ノ交ニハ助代、伊作鑛山ノ如キ十貫乃至六十貫ノ銀ヲ産出シ、

阿多鑛山次テ起リ此地方ニ於テ全盛ヲ極ム、其他浦ノ名、池邊、湯ノ浦等ノ諸鑛山アリ、同三十年以後ニハ諸鑛山何レモ俄ニ衰運ニ赴キ爾後復タ振ハスシテ廢山ニ歸セルモノ多シ、近年或ハ舊坑ヲ開掘シ或ハ新ニ探鑛採掘ニ從事セシ樋渡、石塔庵、堀切、浦ノ名、東平、山神、砂瀬戸及助代鑛山等アレトモ現時概ネ休山シ只浦ノ名(花房某所有)東平、堀切、助代ノ諸鑛山ノ僅ニ稼行セルアルノミ、蓋シ是等ノ鑛山ハ已ニ上部ノ富鑛部ヲ稼行シ漸ク下底ニ進ミテ鑛石ノ品位劣等トナリ且ツ出水甚シク遂ニ廢山スルニ至レルモノナリ、而シテ往昔ノ廢鑛ニヨリ産額ヲ維持シタルモノモ已ニ殆ント採取シ盡シテ遂ニ其事業ヲ中止スルニ至レリ地質及鑛床 此地方ノ中央ヲ北東ヨリ南西ニ走レル金峰山脈ハ中生層ノ砂岩、粘板岩ノ互層ヨリナル、地層ハ褶曲スルモノ一般ノ層向ハ北三十度東ニシテ傾斜ハ一定セス、此山脈ノ外側ハ火山灰及灰石ヲ以テ被覆セラレ臺地狀ノ丘陵ヲナス、數多ノ石英脈ハ中生層中ニ胚胎セラレ西北西ヨリ東南東ニ走リ北方ニ急斜スルモノ多シ、此等鑛脈ヲ稼行セ

ル鑛山ハ今ヤ多クハ休業シテ鑛脈ノ状態ヲ詳ニセサレトモ硫化銀ヲ  
主産シ少量ノ金ヲ隨伴ス、獨リ神威鑛山及樋渡鑛山ノ如キハ金ヲ主産  
セリ

事業 現時稼行ノ助代鑛山ニアリテハ數年來往昔貧鑛トシテ廢棄シ  
タル殘鑛ヲ採取シテ製煉シタレトモ今ヤ殆ント之ヲ採取シ盡シタリ、  
本山ニ於テ稼行セルモノハ田ノ元、湯ノ元ノ二脈ニシテ幅一二尺ヨリ  
八九尺ニ達ス、近年從來ノ坑道ノ下通リニ疏水坑ヲ開鑿シ田ノ元鑛ニ  
會シ之ヲ稼行ス、製煉用トシテ木製水車一臺アリ、明治三十九年ノ產出  
銀四貫三百五十一匁、同四十年ニハ二十四貫六百十七匁ナリ

堀切鑛山ニハ一條ノ鑛脈北東ニ急斜シ幅ハ數寸ヨリ三四尺ニ膨大ス、  
明治三十九年ニハ一箇月銀一貫、金十五匁ヲ產セリ、其支山東平鑛山ニ  
ハ幅三四寸ノ赤褐色ノ粘土鑛二三條アリテ金ヲ含有ス、創業日尙淺ク  
未タ鑛ニ沿フテ十數間ヲ掘進セシニ過キス、浦ノ名鑛山ニ於テモ亦赤  
褐色ノ粘土鑛及石英脈ヲ稼行ス、目下鑛ニ沿フテ進ムコト十五六間今

尙掘進中ナリ、一箇月千四五百貫ノ鑛石ヲ採掘シ粉碎シテ直ニ青化製煉ニ付ス、明治三十九年ノ産出額ハ金五十四匁、銀二貫百三十一匁ナリ  
 産出額

現時廢業鑛山ニ屬スレトモ嘗テ稍多量ニ産出シタル二三鑛山ニ就テ知リ得タル産出額ヲ示セハ次ノ如シ  
 助代鑛山

年 別	銀	製煉元鑛高
明治三十年	五三〇 <small>匁</small>	二、六四六 <small>匁</small>
同 二十九年	六七、八一 <small>ニヨル</small> 鑛山便覽	不 明
同 二十八年	一〇九、一三五 同	同
同 二十七年	三九、九〇〇 同	同
同 二十六年	六五、六七〇 同	同
同 二十二年	五二、五二〇	八〇、八九〇
同 二十一年	五六、八五六	七四、四五九

伊作鑛山

明治三十一年

五、四二〇

一一、九一〇

明治	三十九年	五、〇四〇	一、三〇五
同	二十九年	三、八〇七	九、五七〇
同	二十二年	二八、六二二	五四、二九〇
同	二十一年	一〇、三二五	二四、〇一九

阿多鑛山（大阪造幣局ノ報告ニヨル）

明治	二十九年	六五、五四四	
同	二十八年	一〇四、二六五	
同	二十七年	五八、〇八〇	
同	二十六年	四六、一八一	
同	二十五年	一〇五、七四二	
同	二十四年	一七、二三九	

### 五 鹿籠地方

沿革 此地方ハ往昔ヨリ著名ノ鑛業地ナリ、有名ナル鹿籠鑛山ハ天和三年ニ發見セラレ直ニ島津家ノ稼行スル所トナリ、時々中止ノ不幸ニ會シタレトモ正徳年間、文化年間ニ大盛ヲ致シ近年漸ク衰運ニ向ヘリ、此他其附近並ニ坊、泊等ニ十餘ノ鑛山アリト雖モ鑛脈ノ含有品位劣等

ナルカ若クハ其幅甚タ狭小ナルカ或ハ鹿籠鑛山鑛脈ノ鑛先キ若クハ其一部ヲ稼行スルニ過キスシテ產出少ナク、鑛業ヲ維持スルコト困難ニシテ興廢常ナク特ニ記スルニ足ルモノナシ

地質及鑛床 鹿籠鑛山附近ハ主ニ中生紀ノ砂岩、粘板岩ノ互層ヨリナリ、第三紀ノ凝灰質砂岩、頁岩及角礫岩小區域ニ露出ス、中生層ヲ貫キテ石英斑岩ノ岩脈アリ、黑色ノ輝石安山岩ハ區域ノ南部ヲ構成ス、火山灰及灰石ハ以上ノ諸岩盤ヲ被覆シテ其分布廣シトス

鑛床ハ石英脈ニシテ其數甚タ多ク主ニ北東ヨリ南西ニ走リ北西ニ急斜ス、主脈ト稱スヘキ者ハ本鑛、竹長鑛、河原鑛及諏訪鑛ニシテ脈幅一二尺ヨリ五六尺ニ達ス、通常鑛石ハ銀ヨリモ金ニ豊ニシテ粘土ヲ雜エ黃鐵鑛ヲ散點ス

事業 從來主トシテ稼行セラレタルハ前記ノ四脈ニシテ今後ニ於テモ亦探鑛セラルヘキモノタリ、而シテ上部ノ良好ナル部分ハ殆ト已ニ掘盡セラレ、現時ハ只僅ニ舊坑内ニ殘存セル鑛石ト主脈ヨリ分岐セル

薄脈トヲ稼行スルノミ、稼行ハ之ヲ自稼人ニ委シ本山ノ直營ニ於テハ探鑛ト及鑛尾ノ一部ノ青化製煉ヲ施行ス、其產出額左ノ如シ

年 別	金	銀	製煉元鑛高
明治四十年	三、一九三 <small>外</small>	二、七六〇 <small>外</small>	四一七、八六〇
同 三十九年	四、八九七	三、三八三	七二二、〇〇〇
同 三十八年	五、一一九	四、〇五六	七九三、二三〇
同 三十七年	二、八四一	一、七二五	四九八、八〇〇
同 三十六年	三、九八〇	二、四一〇	一、〇五七、七六〇
同 三十五年	三、九〇五	二、三五八	六六五、六〇〇
同 三十四年	三、八六九	二、二一〇	五八六、九五一
同 三十三年	四、三一四	二、四四一	不 明
同 三十二年	六、三九一	三、〇三一	四九〇、五一〇
同 三十一年	三、三〇二	一、九五二	六二二、七六五
同 三十年	五、二五〇	三、七九三	一、〇六六、五九〇
同 二十九年	六、〇〇一	四、三五八	一、〇一五、〇二〇
同 二十八年	五、二三一	三、八〇三	不 明
同 二十七年	六、七七三	四、八八五	同
同 二十六年	六、八四六	四、九九八	同
同 二十五年	七、〇二一	五、一三九	同
同 二十四年	八、一七五	五、九四六	同

明治二十三年	五、四五二	三、九四八	不	明
同二十二年	四、三一九	三、一一二	一、〇五二、二二〇	
同二十一年	六、〇二三	四、二一九	一、三三四、七一〇	

### 六 池田地方

此地方ニ於ケル主ナル鑛山ハ銀ヲ主産シ且大谷鑛山ヲ除ケハ其創業ハ皆近年ノコトニ屬セリ、即チ辨財天鑛山ハ明治二十八年ノ發見ニ係リ同三十三年ヨリ多量ノ銀ヲ産出セリ、大谷鑛山ハ已ニ六十年前ニ發見セラレタレトモ稍盛ニ稼行セラル、ニ至リシハ明治三十年前後ナリトス、頼娃鑛山モ亦同三十年ノ交ヨリ産出ヲ見、生見鑛山ハ明治二十六年ノ交ヨリ稼行セラレ最モ多量ニ銀ヲ産出セシハ同三十年前後ナリトス、今ヨリ六七年以前ヨリ金切、鬼門、河内山、池田、陣ノ山、立神、小金、烏帽子、日影、仁田平等ノ諸鑛山稼行セラル、ニ至リシモ日影、仁田平二鑛山ヲ除ケハ産出金銀一貫目ニ達スルモノ稀レナリ、而シテ一時盛大ヲ極メシ生見鑛山ハ已ニ廢棄セラレ、辨財天鑛山モ一時事業ヲ休止セントス、蓋シ兩鑛山ニアリテハ已ニ上部ノ富鑛部ヲ採掘シ盡シ下部ハ

出水甚シク操業困難ナルニヨリ事業ヲ中止スルニ至レルナリ、其他大谷附近、仁田平附近ノ小鑛山ハ興廢常ナク、現時稼行スルモノ五六ニ過キス

地質及鑛床 基盤ハ第三紀ノ凝灰頁岩及角礫岩ニシテ其層位殆ント水平ニ近シ、之ヲ貫キテ粒狀安山岩、石英粗面岩、角閃石安山岩、輝石岩山岩噴出シ灰石及火山灰之ヲ被覆ス、鑛脈ハ石英脈及粘土脈ニシテ又互ニ縞狀ヲナスコトアリ、一般ノ走向ハ南北ニ近ク傾斜ハ急ニシテ時トシテ直立スルモノアリ、鑛脈ノ數ハ非常ニ夥多ナルモ大谷鑛山ノ本鑛、旅順鑛及立神鑛、辨財天鑛山ノ一號鑛、二號鑛、日影鑛山ノ菖蒲鳥鑛、仁田平鑛山ノ本道鑛ヲ主要ナルモノトス、鑛石中ニ含有セラル、金銀ノ割合ハ北方大谷、仁田平鑛山附近ニハ金ヲ、南方辨財天鑛山附近ニハ銀ヲ主産ス、而シテ大谷鑛山ノ本鑛及日影鑛山ノ菖蒲鳥鑛ハ下部ニ於テ黃銅鑛ヲ伴ヒ閃亞鉛鑛及方鉛鑛ヲ混有ス

事業 穎娃、辨財天鑛山ハ現時休稼ス、鬼門鑛山ニハ脈幅三尺以上ノ者

十八條ヲ算スト雖モ鑽石ノ品位劣等ナリ、日影鑛山ハ主トシテ脈幅平均一二尺ノ菖蒲鳥鑛ヲ稼行ス、鑛石ハ良好ニシテ一日約六百四十貫ヲ採掘シ、仁田平鑛山ハ脈幅平均三尺ナル本道鑛ヲ稼行ス、金銀含有ノ品位良好ナリ

大谷鑛山ニ於テハ本鑛ハ脈幅數寸ヨリ六七尺ニ達シ平均二三尺アリ、下部ニ至リテ黃銅鑛多ク金ノ製煉困難ナリ、旅順鑛ハ脈幅二三尺アリテ石英及粘土ヨリナル、其他立神、北立神及日之出鑛等アリ、現時本鑛ノ採掘ヲ中止シ旅順鑛、立神鑛、北立神鑛、日之出鑛ヨリ一日約三千六七百貫ノ鑛石ヲ採掘ス

產出額

仁田平鑛山（括弧内ノ數字ハ同鑛山ニテ調査セシモノナリ）

年 別	金	銀	製煉元鑛高
明治四十年	一、七八〇 <small>匁</small> （一二、三五二）	三、六八二 <small>匁</small> （三七、七八八）	四七五、八〇〇 <small>匁</small>
同 三十九年	一、二三五（一七、七二六）	九六六（四六、四七六）	六九一、二〇〇
同 三十八年		六四八	七二、三〇〇

日影鑛山

明治四十年	七、八五〇	五、四五〇	(約)二三〇、四〇〇
同三十九年	二、三一七	二、四一七	二一、四一〇
同三十八年	三〇	二〇	五、〇〇〇
同三十七年	一〇八	七八	一八、六〇〇
同三十六年	一三〇	六五	六五、〇〇〇
同三十五年	一八四	九二	九三、〇〇〇
同三十四年	一二〇	四五	五六、〇〇〇
明治三十二年及同三十三年ハ產出額不明			
明治三十一年	一二〇	六〇	六、〇〇〇
同三十年	三六	二四	三、〇〇〇

大谷鑛山 (括弧内ノ數字ハ大阪造幣局報告ニ據ル、一ハ產出ナキモノ

ナリ)

明治四十年	八、二八九	九、六九一	一、四三二、八八九
同三十九年	一一、九一〇	二六、二一一	一、四三〇、〇四四
同三十八年	一一、七八八	一四、六五七	三八〇、四三三
同三十七年	一、五三三	一、六八〇	一五九、八〇一
同三十六年	六七九	四一〇	八四、九五〇

明治三十五年	四〇五	九九	五五、〇〇〇
同三十四年	一、一六七	二八九	四九、八三〇
同三十三年	七五〇(一七、三八三)	一五〇	三六、一二六
同三十二年	七二〇(六、二五八)	一三〇	二五、五二〇
同三十一年	四五五	—	一五、二六〇
同三十年	二七〇	—	九、〇〇〇

廢業鑛山ハ其數多ク悉ク其産出額ヲ知ルコト難シ、左ニ主要ナル  
 三鑛山ニ就テ調査シタル産出額ヲ示サン(括弧内ノ數字ハ大阪造  
 幣局報告ニ據ル、—ハ産出ナキモノナリ)

辨財天鑛山

年 別	金	銀	本山ニテ調査ノ青金高	製煉元鑛高
明治四十年	一、〇一四 <small>タ</small>	二三〇、一八三 <small>タ</small>	一八二、二三〇 <small>タ</small>	四七〇、〇〇〇 <small>實</small>
同三十九年	四、三五五	五〇六、〇九九	五二〇、一七六	五六五、〇〇〇
同三十八年	三、〇四一	三四五、二七四	三四〇、〇七〇	四一五、九九二
同三十七年	—	八四、〇〇〇	五二二、五四七	一六〇、〇〇〇
同三十六年	—	八七、六〇〇	一、一二四、四一一	一四六、〇〇〇
同三十五年	—	九七、四四〇	五三〇、七三一	三六、〇〇〇

青金ノ品位ハ明カナラサルモ鑽石ノ品位ニ就テ見レハ銀ハ凡ソ金ノ  
 百倍乃至二百倍ニ當レルカ如シ  
 生見鑛山

年 別	銀	製煉元鑛高
同三十四年	一	七二、〇四八
同三十三年	一九七	六三一、一一〇 一〇〇、二九八 五六一、六〇〇
明治三十八年	—	九、〇〇六 不明
同三十七年	—	一二、〇〇〇 <small>(採鑛高)</small>
同三十六年	六九、〇七四 <small>外</small>	二八、〇〇〇 <small>(同)</small>
同三十五年	一八六、八九三	九六、〇〇〇
同三十四年	一九三、一〇〇	二一二、〇〇〇
同三十三年	二二九、五〇〇 <small>(四五五、五六二)<small>外</small></small>	二二五、〇〇〇
同三十二年	二六八、二六〇 <small>(六九六、〇〇三)</small>	二六三、〇〇〇
同三十一年	三九四、八五六 <small>(六四五、四二七)</small>	一七九、五〇〇
同三十一年	三〇七、八六八 <small>(四一五、八〇四)</small>	一八四、九七三
同二十九年	三三二、六〇二 <small>(五四〇、二二三)</small>	一八〇、二〇〇
同二十八年	二五九、四三五 <small>(三八〇、一六八)</small>	不明
同二十七年	不明	不明
	(一四一、三八七)	同

額娃鑛山

明治三十九年	三一、七六〇 <small>分</small>	四五、四一五 <small>分</small>
同三十八年	三一、四三七	五六、七五〇
同三十七年	三七、八〇八	八一、五〇〇
同三十六年	二五、二九三	六八、〇〇〇
同三十五年	二七、五七六	七七、五〇〇
同三十四年	六、五九三	三五、二〇〇
同三十三年	八、七四〇	四六、〇〇〇
同三十二年	九、八八〇(六三、四四六) <small>分</small>	五二、〇〇〇
同三十一年	五、六〇一(四〇、一〇〇)	三四、〇〇〇
同三十年	八、七四〇(一七、九六六)	四六、〇〇〇

七星野及綯生野地方

星野産金地ハ其起原甚タ古ク、其開發ノ時代ハ之ヲ知ルヲ得サレトモ  
 往昔遺棄シタル廢鑛ノ堆積ニ徴シ及其當時ノ製煉用石臼ノ夥多現存  
 スルニ見ルモ其盛況ヲ窺フヲ得ヘシ、口碑ノ傳フル處ニヨレハ三百年  
 前鹿兒島ノ人來リテ盛ニ稼行シ多量ニ産出シタリト云フ、明治ノ初年  
 一時久留米藩主ノ稼行ニ歸シタリシモ幾クナラスシテ休止シ爾後村

人ノ稼行ニ任セリ、明治二十五年ノ交出籠某ナルモノ此附近ニ於ケル鑛區ノ大部分ヲ買收シ、同三十年前後更ニ同人ノ手ヲ離レ數多ノ鑛山ニ分割稼行セラル、ニ至レリ、爾來今日迄連續操業スル者ハ矢野某及平岡某ノ鑛區ノ外其數二十有餘アリ、然レトモ事業ハ常ニ不況ヲ免レスシテ自稼人ニ委シテ小規模ニ僅ニ稼行スルノミ、而モ多クハ廢鑛ヲ拾集シテ製煉ニ供セリ、現時鑛主ノ直營ニシテ事業ノ稍見ルヘキハ筑後鑛山アルノミ、鯛生野鑛山ハ明治三十一年ニ發見セラレ爾來操業宜シキヲ得テ漸ク盛況ヲ呈セントス

地質及鑛床 地質ハ輝石安山岩ニシテ古生層ヲ貫キテ迸發シタルモノナリ、國境附近ニ於テハ更ニ安山岩ヲ被フテ灰石アリ、古生層ハ本星野村ノ外、浦平野ニモ其小露出アリ、層向ハ北七十度東ニシテ一般ニ緩傾斜ヲナス

數多ノ石英脈ハ輝石安山岩中ニ胚胎セラレ一般ニ西北西ヨリ東南東ニ走レリ、傾斜ハ普通急ニシテ直立スルモノアリ、只一二條ノ横鑛ト稱

セラ、鑛脈ハ極メテ緩ナル傾斜ヲナス、鑛脈中此地方ヲ通シテ親鍾ト稱スヘキモノ三條アリ、内二間鍾最モ著シク露頭ノ延長六千尺ニ達ス、其他筑後鑛山及鯛生野鑛山ニ於テ脈幅七八尺ノ良好ノ鑛脈アリ

事業 鑛山數多アレトモ筑後鑛山ヲ除ケハ皆自稼人ノ稼行ニ委セリ、各鑛山ニハ各脈幅一尺乃至四五尺ノ石英脈二三條アレトモ深ク探鑛セス、多クハ廢鑛ヲ集拾シ或ハ脈幅狹キ鑛脈ヲ探掘シ自稼人ニハ厚幅ノ鑛脈ノ探掘ヲ許サス

數多ノ鑛山中矢野鑛山ニ屬スル七鑛區最モ盛ニ稼行セラル、同山ニアリテハ二間鍾ノ外幅約七尺、同五六尺及同三四尺ノモノ四條アリ、未タ盛ニ稼行セラル、ニ至ラスト雖モ明治四十年ニハ產額増加シテ約十五貫ノ青金ヲ產出セリ、平岡鑛山ニアリテハ脈幅一尺以下ノ鑛脈ト廢鑛トヲノミ稼行シ未タ厚幅ノ鑛脈ノ探掘ニ着手セサレトモ該山ニ屬スル鑛區ヨリ明治三十九年ニハ金三貫九百四十六匁、銀五貫七百二十四匁ヲ產出セリ、筑後鑛山ハ未タ多量ノ產出ナシト雖モ現時探鑛ニ從

事シ脈幅三四尺ヨリ十尺内外ノ鑛脈ヲ走向ニ沿フテ四五百尺、傾斜ニ二百尺掘進セリ、本脈ニ含有セラル、金ノ品位ハ十萬分ノ二乃至三ナリト云フ、現ニ計畫セル擴張工事成ルノ日ハ一日十五噸ノ鑛石ヲ處理スル豫定ナレハ此地方ニ於テ多量ノ產出ヲ見ルニ至ルヘシ、其他金原鑛山ハ明治四十年ニハ金一貫二百七十三匁、銀九百三十七匁ヲ產シ、星野金山合資會社ハ同四十年其三鑛區ヨリ金三貫三百二十六匁、銀二貫五百七十一匁ヲ得タリ

鯛生野鑛山ニハ主ナル鑛脈三條アリ、幅三四尺ヨリ十尺ニ達ス、發見ノ當時ヨリ稼行セシ一脈ハ三四箇年稼行ノ後品位劣等トナレルヲ以テ其探鑛ハ之ヲ後日ニ譲リ、現時他ノ一脈ノ探掘ニ着手シタリ、而シテ本鑛脈モ漸ク貧鑛トナレトモ尙金ノ品位百萬分ノ八九乃至十萬分ノ一二ナリ、現時走向ニ沿フテ五百尺、傾斜ニ百二三十尺ヲ掘進シ、尙西方部及下部ニ掘進中ナリ、現今一日ノ探鑛高ハ約三千貫ナリ、製煉用ニハ水車二十六臺、徑六尺、深サ五尺ニシテ六百貫入ノ青化熔解槽十一本アリ

産出額 以上各鑛山累年ノ産出額ヲ左ニ掲ク(一ハ産出ナキモノ)  
 矢野鑛山

瀧ノ脇鑛區

年	別	金	銀	製煉高元鑛
明治	四十一年	一一、六三二(青金)		四〇三、四六〇 <small>貫</small>
同	三十九年	九、三二五(同)		不明
同	三十八年	二、七五六		一五五、九八五
同	三十七年	二、五五四	二、二八五 <small>匁</small>	一四四、一七七
同	三十六年	二、四八七	一、七〇四	三〇三、〇二八
同	三十五年	二、一六一	一、六三〇	三〇三、一七八
同	三十四年	一、二二三	九六一	五一、九八四
同	三十三年	一、二九四(青金?)		三六四、八〇〇
同	三十二年	五〇一(同)		三三七、四三一
同	三十一年	八八(同)		三七、七一四

谷頭鑛區

明治	四十一年	瀧ノ脇鑛區ノ分ト合同		
同	三十九年	同		
同	三十八年	二、一三三	一、八二七	一一八、七三四

同	三十七年	一九五	一三〇	一一一、一五四
同	三十六年	一、一〇五	八六八	一三九、六八三
同	三十五年	二、四九二	一、二七二	二一四、二六〇
同	三十四年	二六七	一三九	二五、九八六
同	三十三年	七七八(青金?)		一五九、二〇〇
同	三十二年	不明		
同	三十一年	一一〇		一〇六、一〇一

矢野鑛區

明	治	四	十	年	瀧ノ脇鑛區ノ分ト合同		
同		三十八年			六一	四九	三、〇七二
同		三十七年			三一	二一	一、八〇八
同		三十三年			七八四		四七、一〇六
同		三十二年			三、四四五		二二五、四〇〇
同		三十一年			二、二九七(青金)		二五五、〇〇〇

第二矢野鑛區

明	治	四	十	年	瀧ノ脇鑛區ノ分ト合同		
同		三十九年			同		
同		三十八年			八二五	八二五	七二、一二三

明 治	三十七年		一、四六八		一、一八三		一〇四、〇八五
同	三十六年		一、一七四		一、〇八八		一五七、一一二
同	三十五年		二、〇四四		一、四二一		二七七、三九〇
同	三十四年		一、二五五		八七二		六〇、四七一

柳原鑛區

明 治	四十年	瀧ノ脇鑛區ノ分卜合同					
同	三十九年	同					
同	三十八年		二六四		一五八		九、八三八
同	三十七年		二九一		三一四		二四、九八六
同	三十一年		一〇八		一		四、九七七

熊渡鑛區

明 治	三十九年		六五一		五三四		八七、〇五〇
同	三十八年		八二五		六七五		三〇、〇〇〇

丸野鑛區

明 治	三十九年		二、七六六		三、一八七		一六六、三五四
同	三十八年		二、三六八		三、七〇五		一五五、六三四

同	三十七年	二、四二三	三、七一五	二三一、四九三
同	三十六年	三、九〇九	三、二七三	二九〇、一三〇
同	三十五年	三、八五四	三、〇二八	二二四、九〇〇
同	三十四年	一、二二七	九六四	六七、三五〇
同	三十三年	九七九(青金)	—	三二、六四〇
同	三十二年	二、二九一(同)	—	八七、四三一二
同	三十一年	五七六(同)	—	一二四、三八三

平岡鑛山

星野鑛區

明	治	三十九年	一、七四六	二、四一六	七四、二九九
同		三十八年	二七一	六二五	二〇、〇〇八
同		三十七年	五二三	六九五	五二、三八〇
明治三十五年及同三十六年ハ產出額不明					
明	治	三十四年	一、五六〇	八〇二	三二二、二五九
同		三十三年	一、一八六	六一九	一五九、六四七
同		三十二年	不明	—	—
同		三十一年	五九五	七九二	三九、六八三

第二星野鑛區

第三星野鑛區

明 治	三十九年	七三一	一、〇九三	三〇、四九〇
同	三十八年	七三	二二六	二、八八〇

余里鑛區

明 治	三十九年	一六六	二六六	六、六六四
同	三十八年	五九	一九六	三二、四〇〇
同	三十七年	一七九	二七八	三六、六五二

麻生鑛區

明 治	三十九年	六二	一	五、三七五
同	三十八年	四七	一	四、八二〇
同	三十七年	三二四	一	三二、三八〇

第二麻生鑛區

明 治	三十九年	一、一六九	一、九四九	五、二〇二
同	三十八年	一二六	三二八	一八、〇〇〇
同	三十七年	一六九	一八四	一六、九二〇

明治	三十九年	七二	一二一	三、五七〇
----	------	----	-----	-------

筑後鑛山

明治	四十年	六四〇	一、八四三	四七二、二七六
同	三十九年	八一三	一、七一九	七六、〇一五
同	三十八年	二五〇	四七八	一九、〇八二
同	三十七年	六九	一〇四	七、〇〇〇

金原鑛山

明治	四十年	一、二七三	九三七	一五七、七五〇
同	三十九年	一、六九七	一、一六七	一八五、四〇〇
同	三十八年	二、五四九	一、七七五	一九三、一五〇
同	三十七年	一、九二六	一、三三六	一八九、六二六
同	三十六年	五〇一	三四八	一〇〇、一五一
同	三十五年	一、四三四	一、〇八一	二八一、七九二
同	三十四年	一、三八八	一、〇〇五	二五五、〇二三
同	三十三年	一、八三二(金青?)		二〇五、一八四
同	三十二年	二、六八七(同)		四一三、三八六
同	三十一年	五、九二六(青金)		六七七、二五七

星野金山合資會社

小室鑛區

同	明治	四十年	一、九三三	一、四一八	四一〇、〇〇二
同		三十九年	二、四四三	一、〇七七	五四三、四二七
同		三十八年	三、五九一	二、二三一	七五二、七九〇
同		三十七年	六七九	二、二二〇	七九二、一五
同		三十六年	六、三六八	三、八九五	六五二、四〇四
同		三十五年	五、九六七	三、四七六	三九五、七三七
同		三十四年	三、一一六	一、八一五	二九六、四六四
同		三十三年	三、六七二(青金?)		不明
同		三十二年	五、四一八(同)		二二九、九六四
同		三十一年	一、五九二	一、〇五二	一六八、五二四
同		三十年	不明		
同		二十九年	九一〇	五五九	二二三、一三三

尾結鑛區

明治三十八年以降小室鑛區ノ分ト合同					
明	治	三十七年	(全上?)四芘		四芘
同		三十六年	不明		三六一芘

明治三十二年ヨリ三十五年ニ至ル産出額ハ小室鑛區ト合同

明治 三十一年

五二九

三四四

八、四一三

唐迫鑛區

明治	四十一年	一、三九三	一、一五三	八三、四八八
同	三十九年	四一四	二五七	五五、九六九
同	三十八年	四	二	一四四
同	三十七年	二九	九	三、三六〇

鯛生野鑛山

明治	四十年	二一、八六八	一四、四五九	九七九、二八三
同	三十九年	一四、六三九	一〇、〇七八	一、一八五、七五八
同	三十八年	二三、一六五	一五、六八八	九八八、〇四六
同	三十七年	二一、六〇九	一五、二三七	一、〇三〇、三六五
同	三十六年	二九、二〇一	二〇、五六四	一、四五二、七二九
同	三十五年	八、一六九	六、三七三	一、二〇八、九七七
同	三十四年	一六、二七三	一二、一八七	一、二三八、二一九
同	三十三年	九、九二八	七、五六一	一、二三三、一一一
同	三十二年	九、〇六二	六、三〇二	六三四、五六〇

## 八 玖珠地方

此地方ノ鑛業ハ徳川幕府代官ニヨリ稼行セラレシ時ニ於テ最モ繁盛ナリシカ如ク其當時ノ舊坑ハ蜂巢ノ如ク今尙存在ス、十年以前玖珠、引治等ノ諸鑛山再興セラレテヨリ此附近ニ鑛業ヲ營マントスル者續出シタリ、而シテ數多ノ鑛區ハ近來豐薩鑛山ト引治鑛山ニ合併經營セラ、ニ至レリ、其他一二探掘ニ從事スル者アレトモ云フニ足ル者ナシ地質及鑛床 此地方ニ特有ノ地形ヲナス高キ臺地ハ灰石ヨリナルモ其基底ハ第三紀頁岩ナリトス、層向ハ北五十度西ニシテ南西十五度ニ傾斜ス、此外輝石安山岩ヲ見ル

鑛床ハ頁岩中ニ胚胎スル粘土鑛及石英脈ナリ、數多ノ鑛脈ハ不規則ニ亂走スレトモ北八十度西ニ走り南ニ急斜スルヲ普通トス、粘土鑛ニアリテハ金ハ粘土中及鑛ニ接シテ多少矽化シタル母岩ノ一部ニ存在ス、石英脈ハ粘土鑛ヲ貫キテ現ハル、コトアリ、其幅廣キモノアレトモ多クハ細脈ニシテ不規則ニ亂走ス、頁岩層ノ下底部安山岩モ亦石英脈ニ

ヨリ貫通セラル、共成鑛物トシテハ硫化鐵鑛最モ普通ナリ  
事業 引治鑛山ニアリテハ頁岩中ニ胚胎スル石英ノ細脈ヲ稼行ス、而  
シテ石英脈中ニハ時トシテ肉眼ニテ識別シ得ヘキ自然金ヲ産ス、現時  
一日千六百貫ヲ採掘シ水車三十臺アリテ混汞製煉ヲナシ青化製煉ハ  
之ヲ休止ス

豐薩鑛山ハ明治四十年ニ玖珠、粟野及蕨野ノ三鑛區ヲ合同シテ成立シ  
タリ、近時稍盛ニ稼行シタルハ玖珠鑛區ナレトモ現時ハ主ニ粟野鑛區  
ノ鑛脈ヲ稼行シ僅ニ蕨野鑛區ノ鑛脈ヲ採鑛中ナリ、近年別ニ僅ニ開掘  
セシモノ、外ハ皆舊坑ニ殘存セル鑛石ヲ採掘スルニ過キス、高塚坑及  
蕨野鑛區ニ於テ石英脈ノ探鑛ニ從事スレトモ未タ見ルヘキ操業ナシ、  
一日ノ採鑛高二千四百貫ナリ、製煉用ニハ水車二十八臺、徑七尺、深サ三  
尺ノ青化溶解槽三本アリ  
産出額（一ハ産出ナキモノ）

引治鑛山

年 別	金	銀	製煉元鑛高
明治四十年	一、九六〇 <small>分</small>	一、九〇〇 <small>分</small>	六七〇、〇〇〇 <small>分</small>
同三十九年	二、〇六五	五、五二六	四三一、〇七三
同三十八年	二、〇七九	—	三五八、〇二〇
同三十七年	二、七八四	—	二九六、五三六
同三十六年	一、六七三	—	四一二、七五三
同三十五年	二、四六三	—	四六一、九五三
同三十四年	一、四九五	—	二四四、一一八
同三十三年	四五〇	—	一三二、〇〇〇
同三十二年	不明	—	—
同三十一年	四〇五(青金)	—	四三、二〇〇

明治三十八年以前ノ銀ノ産出額不明ナルモ其量ハ僅少ニシテ鑛主ノ手許ニ貯ヘ又ハ物品製作ニ使用シタリト云フ

豐薩鑛山

玖珠鑛區

明治三十九年	二、二一一	五、六八七	六八一、九〇〇
同三十八年	二、〇〇四	四六	六八三、五五八

粟野鑛區

明治三十九年	明治三十八年	明治三十七年
		三、八三〇
		九四三、八六七

巖野鑛區

明治三十九年	同三十八年	同三十七年	明治三十二年ヨリ同三十六年ニ至ル産出額不明	明治三十一年	同三十年
		一一九		四二〇	二五二
				二七八	一七〇
				二一四、九八〇	六三、四〇八
		八〇、七五〇			

九 溝部地方

此地方ノ鑛山ハ二百年前徳川幕府代官ノ管理ノ下ニ盛ニ稼行セラレ  
 タリト傳フ、明治ノ始メ小笠原家及奥平家ニ依テ經營セラレシコトア  
 リ、爾後久シク休廢ニ歸セシモ十年以前ニ再興セラレ今日五鑛區ノ採  
 掘セラル、アリ、而モ多クハ廢鑛ヲ稼行スルニ過キスシテ今ヤ之ヲ拾  
 取シ盡セリ

地質及鑛床 地質ハ輝石安山岩及其集塊岩ヨリナル、鑛床ハ粘土鑛ト石英鑛トアリテ一般ニ北西ヨリ南東ニ走リ南西ニ急斜ス、並走セル夥多ノ鑛脈中太良川鑛ハ此地方ノ親鑛タリ

事業 金鉢鑛山ヲ除ケハ皆自稼人ノ稼行ニ委シ草本鑛山ノ如キハ事業ニ着手セス、吉野鑛山ノ鑛區ニハ脈幅一尺乃至三四尺ノモノ四條アリ、「ズリ迫鑛」ハ往昔稼行セラレタルモノニシテ現ニ廢坑ヲ稼行セリ、高岩鑛ハ三四箇年來主トシテ稼行セラレタレトモ出水ノ爲メ現時ハ僅ニ上部ヲ探掘スルノミ、此他尙二脈ヲ探掘シ一日約四百貫ノ鑛石ヲ採取ス、朱山鑛山ハ往昔ヨリ稼行セラレタルモノニシテ、主ナル石英脈ハ幅四五尺アリ、現時品位劣リ廢鑛ト共ニ一日約百二十貫ヲ探掘ス

溝部鑛山ノ鑛區ニ於テハ主ナル鑛脈四條アリ、就中太良川鑛古來ヨリ盛ニ稼行セラレタリ、明治三十二年現鑛主ノ有ニ歸シテヨリ全ク自稼人ノ稼行ニ委シ四五年以來ハ殆ト廢鑛ヨリ金ヲ採取シタリ、而シテ太良川鑛ノ廢鑛最モ多ク今ヤ盡クルニ垂ントシ探鑛ノ方針ヲ一變スル

ノ止ムナキニ至レリ、此外ニ尙一二ノ鑪脈ヲ稼行シテ一日僅ニ二千五百貫ヲ探掘ス、製煉用ニハ水車四十臺アリテ混汞法ニヨリ含有金ノ六割ヲ集取スト云フ、目下青化製煉ヲ施行セス

金鉢鑛山ハ鑛主直轄ニ經營ス、石英脈ハ幅一尺ヨリ三四尺ナルモ品位劣ルヲ以テ探掘ヲ休止シ現時ハ青色粘土鑪ヲ稼行ス、其鑪ニ接シタル母岩ニモ亦金ヲ含有セモルノ、如ク粘土鑪ト母岩ト合シテ幅約十二三尺アリ、現時一日五百貫ヲ探掘ス、製煉用ニハ水車六臺、青化熔解槽四百貫入五本アリ

產出額

吉野鑛山

年別	金	銀	製煉元鑛高
明治四十年	三五六 <small>匁</small>	四六二 <small>匁</small>	一一二、七八〇 <small>匁</small>
同三十九年	一、二八五	二、〇六四	一八六、六八七
同三十八年	四二〇	七四八	四一、七四四

朱山鑛山

明治四十年	七〇五(青金)		五六、一三九
同三十九年	七六六	四一三	一九七、五二五
同三十八年	一、三八八	七四六	一三九、五二五
同三十七年	四八一	二五八	一、二四八、七二六

溝部鑛山

明治四十年	三、〇九五	二、二五五	六四四、九九一
同三十九年	五、一四五	三、五七八	一、一七〇、〇一九
同三十八年	五、四一七	三、六〇五	二、四〇九、八二〇
同三十七年	四、五六二	三、二一七	一、三六八、六〇〇

明治三十二年ヨリ同三十六年ニ至ル間ハ休稼産出ナシ、同三十一年以前ノ産出額ハ不明ナリ

金鉢鑛山

明治四十年	九三四	一、一一九	一六八、〇〇〇
同三十九年	五三六	一、五一九	一五五、三二八

十 波佐見地方

此地方ニハ一波佐見鑛山アルノミ、同山ハ明治二十九年末ノ發見ニ係  
レリ

地質及鑛床 地質ハ第三紀層ニシテ之ヲ貫キテ石英粗面岩アリ、鑛脈  
ハ第三紀層ヲ貫通シ鑛區ノ南部ニハ之ト石英粗面岩トノ間ヲ通セリ、  
主要ナル七條ノ石英脈アリ、脈幅ハ最小三四尺、平均三十尺乃至五十尺  
アリ、露頭ノ延長キハ千間ニシテ短キハ四百間ナリ、一般ニ北々西ヨ  
リ南々東ニ走リ多クハ西方ニ六十度以上ノ急斜ヲナス

事業 現時事業擴張中ニシテ採掘、製煉共ニ休止ス、其工事成ル日ハ多  
量ノ產出アルヘキナリ

產出高

年 別	金	銀	製煉元鑛高
明治四十年	二、八四四 <small>匁</small>	二一、二一三 <small>匁</small>	
同三十九年	一三、〇八五	四九、〇七三	一、〇三三、九七六 <small>匁</small>
同三十八年	一四、五五八	四七、三五八	一、六八九、七七五
同三十七年	一七、五七五	三五、九六一	二、四三六、三〇五
同三十六年	一二、七九二	二二、八一七	二、一二七、〇一七

明治三十五年	八、三一六	九、八一六	一、〇五四、九三三
同三十四年	六、〇一九	五、一一二	一、〇七八、一二四
同三十三年	四、二九六	三、六二八	六五三、〇三三
同三十二年	不明		
同三十一年	一		探礦高 一四五、八三〇

清國浙江省杭州府附近調查概報

清國浙江省杭州府附近調査概報

目次

上海杭州府間	八七頁
杭州府附近	八八頁
杭州府ヨリ桐廬縣ニ到ル	九一頁
桐廬縣附近	九二頁
義橋ヨリ諸暨縣地方	九六頁
臨浦ヨリ紹興府附近	九九頁
總説	一〇〇頁

# 清國浙江省杭州府附近調査概報

囑託員

石井八萬次郎

明治四十一年六月初旬本邦ヲ發シ十日上海ニ着シ、同十六日上海ヲ發シ杭州府ニ入り、更ニ錢塘江ヲ遡リ富陽縣ヲ經テ桐廬縣ニ至リ、同縣ノ無烟炭礦ヲ視察シ江ヲ下リ、富陽縣ノ下流五十清里ナル義橋ヨリ其支流ニ入り臨浦、三江ヲ經テ諸暨縣ニ着セリ、茲ニ同縣下ノ諸鑛山ヲ視察シテ流ヲ下リ、臨浦ヲ經テ運河ニ入り紹興府ニ達シ、同府ノ南東甘溪ニ於ケル銅山ヲ視察シ、紹興府ヨリ運河ヲ過キ西興ヨリ錢塘江岸ニ出テ順路上海ニ歸着セルハ七月十六日ニシテ此間實ニ一箇月ヲ費セリ

上海、杭州府間

上海、杭州府間ハ平坦ナル平野ニシテ粘土若クハ砂質粘土ヨリナル、蓋

シ最近ニ漂積セシモノニ係リ楊子江及錢塘江ノ共同三角洲平地タリ、  
兩地間ハ天然及人工ノ河湖ヲ利用シテ戎克及小蒸汽船ヲ通シ、午後五  
時上海ヲ發スレハ翌日午後一時前後杭州府郊外拱宸橋ニ着スヘシ、途  
中松江縣、嘉興府、石門縣等ノ諸府縣ヲ通過スルモ皆平野中ノ都會ニシ  
テ特ニ見ルヘキモノナシ、唯兩岸ノ桑田ハ茫漠トシテ際涯ナク此地方  
養蠶ノ隆盛ナルヲ想像セシムルニ足ル、此外桃李枇杷樹ノ廣園アリ  
瀛船ノ杭州ニ接近スルヤ水平ナル廣野ノ上ニ遙ニ一二ノ孤山ヲ望ム、  
其高サハ一千尺内外ナルヘシト推測セリ

#### 杭州府附近

小蒸瀛船ノ定繫スル拱宸橋ハ杭州居留地ニシテ外國人ノ居住スルト  
コロナリ、此處ヨリ杭州府城ヲ經テ錢塘江岸迄ハ約三十浬アリテ目  
下鐵道ヲ通セリ、蓋シ浙江省地方ハ昔時越ノ地ニシテ人民富強ト稱ス、  
而シテ此地方ノ產物ヲ支那ノ中央市場タル長江沿岸例ヘハ南京ノ如  
キ、上海ノ如キ、中原地方ナル洛陽、長安ノ如キ、又ハ天津、北京ノ如キ地方

ニ送ルニハ之ヲ外海ヨリスルトキハ海賊ノ難多ク且波浪荒ク殊ニ江蘇、浙江ノ海岸ハ遠淺ニシテ舟行甚タ危險ナリ、其最安全ナルハ運河ヲ通シ上海、蘇州、鎮江ニ至リ彼ノ大運河ニ連絡スルニアリ、而シテ蘇州、杭州ノ地タルヤ地平ニシテ水路縱横ニ通シ、隨テ之ニ多少ノ工事ヲ施セハ殆ト何レノ方面ニモ運河ヲ開通スルヲ得ヘシ、然ルニ浙江省ノ大動脈タル錢塘江ヲ上下スル貨物ヲ此運河ノ船舶ニ連絡スルニハ錢塘江口潮水ノ干滿劇甚ニシテ滿潮ノ時ニハ風ナキニ大浪襲來スルカ如キ危險アリ、實ニ江水ノ漲落甚シクシテ爲メニ自由ニ運河ト連絡スルト能ハサルヲ以テ從來閘門ヲ設ケ水ヲ遮リ、船ヲ通スルトキハ一閘ヲ開キ他閘ヲ閉ツルノ煩ヲ取リタルモ尙甚シキ不便アリ、近來鐵道ノ便人民ノ認ムルトコロトナルヤ、乍チ此間ニ鐵道ヲ敷設シ上海ヨリ瀛船ニテ貨客ヲ拱宸橋ニ致シ瀛車ヲ以テ閘口ニ至ルノ設備ヲナセリ、之ヲ浙江鐵道ノ發端トナス、更ニ此鐵道ヲ一方上海ニ連絡セシメ、他方ニハ江ニ沿フテ富陽縣ニ到リ、茲ニ江ヲ横リテ紹興府、寧波府ニ達スル計畫

アリト云フ、更ニ注目スヘキハ清國ノ鐵道ハ多ク外國人ノ手ニヨリテ建設セラレタルモ此鐵道ノミハ主ニ清國人ノ手ニ成レルコトナリトス、又以テ浙江地方人士ノ如何ニ事業經營ニ敏腕ナルヤヲ知ルヘシ杭州府城ハ南ハ山ニ據リ、東ハ錢塘江水ニ臨ミ、北ト西トハ平地ヲナス、城ノ南西ニ西湖アリ、水淺ク泥深シト雖モ四圍岡丘ヲ繞ラシ風光絶佳ナリ、西湖ノ名ハ夙ニ文人ノ間ニ唱道セラレ、湖邊ニハ名所舊蹟ノ尋ヌヘキトコロ甚タ多シト雖モ其地學上ノ成因ニ關シテハ之ヲ説クモノ甚タ少ナシ

西湖ハ細長ク屈曲シ其最長徑ハ一哩若クハ二哩ナルヘシ、西湖ノ北西岸日本領事館ノアルトコロハ岩石悉ク赤キ火山岩若クハ石英ヲ散點セル凝灰岩ヨリナル、而シテ此火山岩ヲ檢シ更ニ西湖ノ水面ヲ望メハ人ヲシテ直ニ其火口湖ナルヤヲ連想セシムルモノアリ、然レトモ西湖ノ南東岸ニ到レハ石炭紀ト思惟スヘキ石灰岩露出シ、隨テ西湖ハ火口湖ニアラスシテ彼ノ中禪寺湖ノ如ク一方ハ古紀岩層、他方ハ火山岩ヨ

リ成レルモノタルコトヲ知ルヘシ、即チ古紀岩層ヨリ成レル山地ノ側面若クハ溪谷ノ一方火山岩ノ爲メニ閉塞セラレテ成生セラレタル湖水ナルヘシ

杭州府ヨリ桐廬縣ニ到ル

杭州府ヨリ錢塘江ヲ遡リテ桐廬縣ニ到ル水路約二百里ト稱ス、杭州府ヨリ富陽縣ニ至ル約一百清里、富陽縣ヨリ桐廬縣ニ至ル約一百清里ナリ

杭州府、富陽縣間ハ唯舟中ヨリ觀察シタルニ過キサレハ其地質ニ就キテハ之ヲ知ルニ由ナキモ、富陽縣ニ到リテ上陸觀察セシニ縣城ノ東端ニアル岡ハ赤キ火山集塊岩ヨリナレルヲ知レリ、又富陽縣ノ上流十清里ノ地ニハ淡綠色ノ凝灰質砂岩、角蠻岩ヲ採取スル石切場アリ、之ヲ以テ見ルトキハ富陽縣ノ周圍ハ主ニ火山岩ヨリ構成セラル、モノト思惟シテ可ナルヘシ、富陽縣ノ上流二三十清里ニハ成層セル硅岩、硅質砂岩等アリ、蓋シ古生紀ニ屬スルモノナルヘシ

桐廬縣附近ハ全ク古生紀及之ヲ被覆スル中生紀若クハ近生紀ノ成層  
 岩ニ屬シテ火山岩ナシ

桐廬縣附近

桐廬縣附近ニハ鐵鑛及無烟炭ヲ産ス、小官ハ左ノ炭山ヲ視察シタルノ  
 ミニシテ鐵鑛産地ハ之ヲ檢セス、而シテ採取セラレタル標本ヲ檢シタ  
 ルニ皆磁鐵鑛ナリ

一 岩塢山炭山

二 峙山炭山

三 皇甫炭山

一 岩塢山 錢塘江岸灘頭埠(桐廬縣下流約十清里)ニ上陸シ南行スル  
 コト約十五里、錢塘江岸ヨリ約四百尺ノ高所ニ於テ山脚ニ殆ト直立セ  
 ル所謂炭層露出ス、其厚サ二尺内外アルモ質ハ非常ニ惡シク寧ロ含炭  
 砂岩若クハ頁岩層ト稱スルヲ適當トナスカ如ク、炭種ハ無烟炭ニシテ  
 塊狀ヲナスモノハ稍光輝アリ、層向ハ約東西若クハ東北東ニシテ北方

七八十度ニ傾斜ス

炭層ノ上ニハ石灰岩層アリ、其傾斜ハ五十度内外ナリトス、炭層ノ近傍ニハ石灰質頁岩アリ、炭層ノ中ニモ亦多少石灰ヲ含有ス、所謂炭層ナルモノハ三段アルモ皆探掘ニ堪ヘス、炭層露出ノ地ヨリ南方五六百尺ニシテ石英斑岩アリ、此地方ニ於ケル高峻ナル峰嶺ハ主ニ此岩石ヨリナルモノ、如シ

二 峙山 ハ桐廬縣ノ南十五清里ノ地ニアリ、山勢地層共ニ岩塢山ニ同シク其連續セルモノナルヘシ、炭質モ亦殆ト同一ニシテ探掘ニ堪ヘス、炭層ハ其厚サ時トシテ一丈ニ達スルトコロアリテ山腹三四箇所ニ露出スルモ相互ノ連絡ハ明カナラス、或ハ地層ノ褶曲ノ爲メ膨縮セルモノナラン、層向ハ岩塢山ト稍同シキモ傾斜ハ甚タ緩ナリ

三 皇甫 ハ桐廬縣ヨリ小流ヲ遡ルコト約四十清里ノ地ニアリ、此處ニハ厚キ石灰岩露出シ其上ニ炭層アリ、此附近ハ一ノ盆地ヲナシ石灰岩ハ南東ヲ繞ルカ故ニ炭層モ亦隨テ多少彎曲スルモノ、如ク溪流ノ

北岸ト南岸トハ層向殆ト直角ヲナセリ、炭種ハ無燂炭ナルモ灰分稍少ク質淳良ナリ、而シテ南岸ニ産スルモノハ塊炭ニ、北岸ニアルモノハ粉炭ニ屬セリ、炭層ノ厚サハ約四尺ニシテ其中下部ノ一尺若クハ一尺五寸最モ良好ナリ、層向ハ南岸ニハ北西ニシテ北岸ニハ北東ヲ指シ、傾斜ハ南岸ニハ北東二十度ニシテ北岸ニハ南東七十度ナリ

炭層ノ下ニアル厚キ石灰岩ハ明カニ「フズリナ」ヲ含有ス、蓋シ石灰紀ニ屬スルモノナルヘシ

以上三炭坑ヲ視察セシ事實ヨリ推測スルトキハ桐廬縣地方ノ錢塘江ハ一ノ向斜谷ヲ流下シ江ノ南岸ハ北ニ、北岸ハ南ニ傾斜ス、只江岸ニ接近スル一小部分ノミ北岸ハ北ニ、南岸ハ南ニ斜下ス、即チ一ノ大ナル向斜谷ノ底ニ小ナル背斜谷ヲナセルナリ

向斜谷ヲ構成スル岩層ハ主トシテ古生紀ニ屬スルモノ、如ク、江流ノ南方約十五清里ノ距離ニ蜿蜒タル山岳ハ重ニ花崗岩及石英斑岩ヨリ成リ古生層ハ之ト接觸セリ、但シ其著シキ接觸變性作用ハ之ヲ認ムル

コト能ハス、而シテ此接觸部ニ接近シテ粗悪ナル無烟炭層アリ、岩塙山及峙山ノ炭層即チ是ナリ、此等炭層ノ上ニハ岩塙山ニ於テハ石灰岩層アルモ峙山ニハ其存否明ナラス、石灰岩ノ上ニハ砂岩層アリ、傾斜ノ角度ハ山岳ヲ距リ江岸ニ近ツクニ隨ツテ漸次緩慢トナレリ、江岸ニテハ前述ノ如ク反對ニ傾斜シ江ヲ渡リテ北岸ニ到レハ傾斜再ヒ相反シ茲ニ小ナル背斜ヲナス

江ノ北岸ハ一般ニ南ニ傾斜シ北ニ進ムコト三十五清里ニシテ皇甫ノ石灰岩ヲ見ル、此石灰岩ノ窪地ニ皇甫ノ炭層アリ、此炭層ハ錢塘江ノ南岸ニアル岩塙山ノモノト異ニシテ明カニ石灰岩ノ上ニアリ、若シ皇甫ノ石灰岩ヲ岩塙山ノモノト同一層ナリト思惟スルトキハ此地方ニハ石灰岩ノ上ニアル炭層ト、下ニアル炭層トノ二種類アルコトヲ想像スルニ難カラス

南清地方ノ低地ニ多ク露出セル赭色岩層ハ此地方ニハ歛如シテ最上部ニハ錢塘江ノ最新漂積物タル砂質粘土アリ

義橋ヨリ諸暨縣地方

富陽縣ノ下流約五十清里ナル義橋ヨリ支流ヲ遡レハ諸暨縣ニ到ルヘシ、此流域ノ下流ナル義橋、臨浦地方ニハ主ニ淡灰色若クハ淡綠色ナル凝灰岩及石英粗面岩能ク發達ス、恐クハ富陽縣附近ノ火山岩ト相連續セルモノナラン、義橋ヨリ遡ルコト約六十清里ノ三江地方ニハ成層岩アリ、新亭埠ノ西ニ水田中ニ孤立セル小丘ハ蓋シ硅岩質ノ變岩ヨリ成レリ、層向ハ北東ニシテ南東ニ緩斜セリ、諸暨縣城ノ附近ハ一般ニ赭色岩層ヨリナル、層向ハ北東ヲ示シ北西若クハ南東ニ緩斜ス、諸暨縣城ノ背後ニアル高サ約六百尺ナル胡公臺ハ石英粗面岩ニ屬スル火山岩ナリ、諸暨縣ノ北東ニアル孤峰モ恐クハ火山岩ナラン

諸暨縣城ヨリ南約十清里ニ石佛アリ、北東約二十清里ニ街亭アリ、此地方一體ハ赭色岩層能ク發達シ、街亭ト五灶ノ間ニハ暗黑色ナル火山岩アリ、五灶、溪北間ニハ石灰岩アリ、溪北附近ニハ閃綠岩ヲ見ル

溪北ノ南ニハ雲母片岩露出ス、層向ハ東西ニシテ南方ニ急斜ス、雲母片

岩ノ上ニハ往々硅岩層アリ、層向傾斜共ニ雲母片岩ト同シ、銀峰尖ニハ花崗岩ノ上ニ厚キ石灰岩アリ、層向北東ニシテ北西ニ傾斜ス、兩岩ノ接觸部ニハ厚サ約三尺ナル亞鉛鑛床ヲ胚胎ス、昔時其露頭ノ分解セル部分ヲ採掘シテ銀ヲ製セリト云ヒ、現ニ大ナル洞窟アリテ其中ニ廟ヲ安置セリ、蓋シ此亞鉛鑛床ハ數百尺ノ下部迄連續スルモノ、如ク下部ノ溪流ニモ大ナル破片ヲ檢セリ、單ニ目測ニヨリテ之ヲ算スルニ約一萬坪ハ鑛床ヲ藏スルモノトシテ可ナルヘク、厚サ平均三尺アリトスレハ三萬立方尺ノ鑛石ヲ得ン、而シテ一立方尺ヲ二百斤トシテ重量六百萬斤トナルノ計算ナリ

銀峰尖ノ西ニ安田ノ谷アリ、此附近ニモ亦各種ノ螢石脈アリテ亞鉛鑛及方鉛鑛ヲ産ス、概言スレハ諸暨縣地方ニハ下部ニ雲母片岩アリ、其上半ニ古生紀ノ石灰岩及砂岩アリテ其一部ニハ無烟炭ヲ藏ス、之ヲ貫キテ花崗岩、閃綠岩及火山岩所々ニ噴出シ、或ハ岩脈ヲナシ或ハ孤立セル岡阜ヲナシ、其上部ニ赭色岩沈澱シタルカ如シ

諸暨縣ノ附近ハ亞鉛、鉛及銀等ノ鑛石ニ富メルモノナルヘク、諸暨縣ニ住スル一紳商ノ語ルトコロ左ノ如シ

溪北大成塢

山甚高大山名大冶山水路約七八里鉛鑛形方極純此鑛昔明時黃仲九開過

洞廠山背後小尖溪

銅鑛

蓼宅 煤礦

現在土人開而資本不足惜水脚甚遠

洞廠山 五金鑛

雪山嶺 在陳兆塢

距縣約三十里銀錫黑鑛開過前明時黃仲九開過

餘者尙有數十處多有不妥者以上之鑛尙有把握也

右ノ談ニ據レハ此地方ハ明ノ時代ニ於テ盛ンニ開鑛セシコト疑ナキカ如ク其當時ノ鑛業家黃仲九ノ精煉セシ鑛滓亦甚タ多キヲ見ル

臨浦ヨリ紹興府附近

諸暨縣ヨリ川ヲ下リテ臨浦ニ至リ上陸シテ東行スルコト二三清里、再  
ヒ上船運河ヲ西方ニ漕行スルコト約百四十清里ニシテ紹興府ニ達ス、  
運河ハ水田中ノ水道ニシテ我邦ノ堀ニ相當ス

紹興府ノ附近ヨリハ高サ五六百尺ヨリ二千尺内外ノ峰ヲ望見シ得ヘ  
ク其最モ奇ナルヲ香爐峰トナス、蓋シ火山凝灰岩ヨリ成ルモノナラン、  
其山腹ハ絶壁ヲナシ上ニ寺院アリテ紹興府附近ノ名所タリ、府ノ南東  
二十餘里南池ニ到リ水道終リ之ヨリ陸行十五里ニシテ甘溪ニ達ス、此  
處ニハ古生層及閃綠岩露出シ其接觸部ニ鑛脈ヲ胚胎ス、鑛脈大凡五條  
アリテ殆ト東西ニ並走ス、土人ノ云フトコロニヨレハ最北ナル一條ハ  
銀鑛、中間ノ二條ハ銅鑛、最南ノ二條ハ金鑛ナリト云フ、該鑛脈ヨリ採取  
シタル標品ヲ東京鑛山監督署ニ依頼シテ分析セシニ其結果左ノ如シ  
中間ノ二條(土人ノ銅鑛ト稱スルモノ)

一 銅

百分中  
〇、八八

二 銅 痕跡 銀 ナシ

最南ノ二條中北ニ位セルモノ

金 痕跡

銀

百分中  
〇、〇、四九七

以上ハ最モ有望ナリト思惟スヘキモノヲ採取シタルナリ、隨テ金鑛トシテ將又銅鑛トシテ價值ナキモノ、如シ、獨リ銀ハ萬分ノ四、九七ヲ有シ有望ナルカ如キモ此鑛脈ハ昔時大ニ採掘シテ現ニ大ナル空洞ヲナスカ故ニ其大部分ハ既ニ採盡シタルモノナルヘク、殘ストコロ果シテ採掘ニ價スヘキ鑛量アリヤ否ヤ明ナラス

甘溪、南池間ニハ厚キ赭色岩層アリ、層向ハ約南北ニシテ東方ニ緩斜ス

總 說

以上視察セシ地方ノ地質ヲ概括スルニ該地方ハ一般ニ火山岩ニ富ミ杭州府城附近、富陽縣附近、諸暨縣附近、紹興府附近等ニハ夥多ノ火山岩岩脈若クハ其凝灰岩及集塊岩アリ、而モ熔岩流ト思惟スヘキモノハ一モ之ヲ檢セス

此等火山岩ノ噴出セシ地盤ハ主ニ古生層ニシテ石灰岩ヲ夾在シ及石炭ヲ埋藏ス、其一般ノ層向ハ東西若クハ東北東ニシテ時ニ北西ノ層向ヲ有スルコトアルハ唯一局部ノ變動ニ基キタルモノナルカ如シ古生層ノ上部ニハ層向傾斜共ニ古生層ト整合的ナルモ一般ニ傾斜角度ノ彼ニ比シテ緩慢ナル砂岩、粘土質砂岩ノ岩層アリ、其上ハ直ニ河流ノ漂積土堆積シ若クハ赭色岩層ヲ以テ被覆セラル、此赭色岩層ハ浙江、江西、湖南、湖北等諸省ノ窪地ニ堆積シ殊ニ四川省ニハ數千尺ノ厚層ヲナシ所謂赭色盆地ヲ形成スルモノナリ、其成因ハ明ナラスト雖モ其分布ヨリ考察スルトキハ一ノ低窪地ニ沼淮的沈積ヲナセシモノ、如シ、四川、湖南、湖北、江西、浙江等諸省ノ赭色岩ハ果シテ同一ノ成分ヲ有スルモノナルヤ否ヤ今俄ニ判斷シ難シト雖モ若シ之ヲ同一ノ成因ニ歸スヘキモノト見做ストキハ此赭色岩層ハ恐ラクハ火山灰ナラン支那ノ火山ハ浙江省錢塘江附近及舟山列島附近ヲ除クノ外他省ニハ稀レニ見ルトコロナリ、安徽、江西二省ニハ往々石英粗面岩ノ岩脈ヲ見

ルモ概シテ甚タ少ナシ、然ラハ即チ南清一帯ニ廣ク頒布セル赭色岩ハ  
浙江省地方ノ火山灰ノ飛揚降下セシモノナルカ、若シ此等ノ火山噴出  
ヲ日本ノ火山ト同時代ニ噴出セシモノトセハ彼ノ赭色岩並ニ凝灰岩  
ハ日本ノ凝灰岩ト同シク近生紀ヲ代表シ第三紀ノ末ヨリ第四紀ニ亘  
レル者ト見ルヲ適當トナス、元來南清ノ赭色岩ハ赭色頁岩、赭色砂岩、赭  
色蠻岩ヲナスト雖モ其砂岩、蠻岩中ノ大ナル石塊ハ皆其附近ノ岩層ノ  
砂礫ニシテ赭色ヲナスモノハ皆細微ナル灰狀ヲナスモノナリ、蓋シ此  
赭色岩中ニ含有セラレ、赭色土ハ火山灰ノ降下セシ者ニシテ砂岩、蠻  
岩ノ如キハ其地ニ存在セシ砂礫ナルヘク、此兩者混合シテ赭色岩ヲナ  
セルモノナルカ如シ、臺灣島ニ於テハ西海岸ニ此赭色土ノ臺地アリテ  
内ニ其他ノ砂礫ヲ含有セリ、而シテ臺灣ノ赭色土ハ第三紀ヲ被覆スル  
カ故ニ明カニ第三紀後即チ主ニ第四紀洪積層ヲ代表スルモノナリ  
南清ノ赭色岩層ハ火山灰ノ盆地ニ沈積セシモノナリト假定スルトキ  
ハ其中生紀ヲ被覆スルノ事實ト（江西省鄱陽湖附近ニハ中生層ノ上ニ

赭色岩アリ)並ニ日本ノ火山ト浙江省地方ノ火山トハ略ホ同時代ノ噴出ニ係レルモノナリトノ推論ヨリ此赭色岩層ニ化石ヲ含マサルニ係ラス之ヲ近世紀ヲ代表スル地層ナリト信ス、唯南清一帶ノ砂土ハ必スシモ浙江省地方ノ火山ノミノ噴出ニ係ルモノナリト思惟スルコト能サレトモ此地方ノ火山モ亦此火山灰ヲ噴出セシ重ナルモノ、一ナリト推定スルヲ得ヘシ

此地方ノ古紀火成岩ハ花崗岩、石英斑岩、閃綠岩等ニシテ新紀火山岩ハ石英粗面岩種ヲ多シトナス

茲ニ最モ注目スヘキハ雲母片岩及古生層ノ如キ古紀岩層ノ層向ハ主ニ東西若クハ東北東ニアルモ、新世紀ヲ代表セル赭色岩層ハ北東若クハ北々東或ハ南北ニ走レリ、即チ此地方ニ於ケル地層ノ褶曲軸ハ古紀ニハ主ニ東西ニアリシモ、新紀時代ニ於テハ南北ニ近ツキ、彼ノ九州島北部ノ古紀岩層ノ東西ニ走り、新紀岩層ノ南北ニ走レルト一般ニ地殼褶曲ノ壓力ハ地質年代ニ應シテ古紀ニハ南北ニ、新紀ニハ東西ニ壓セ

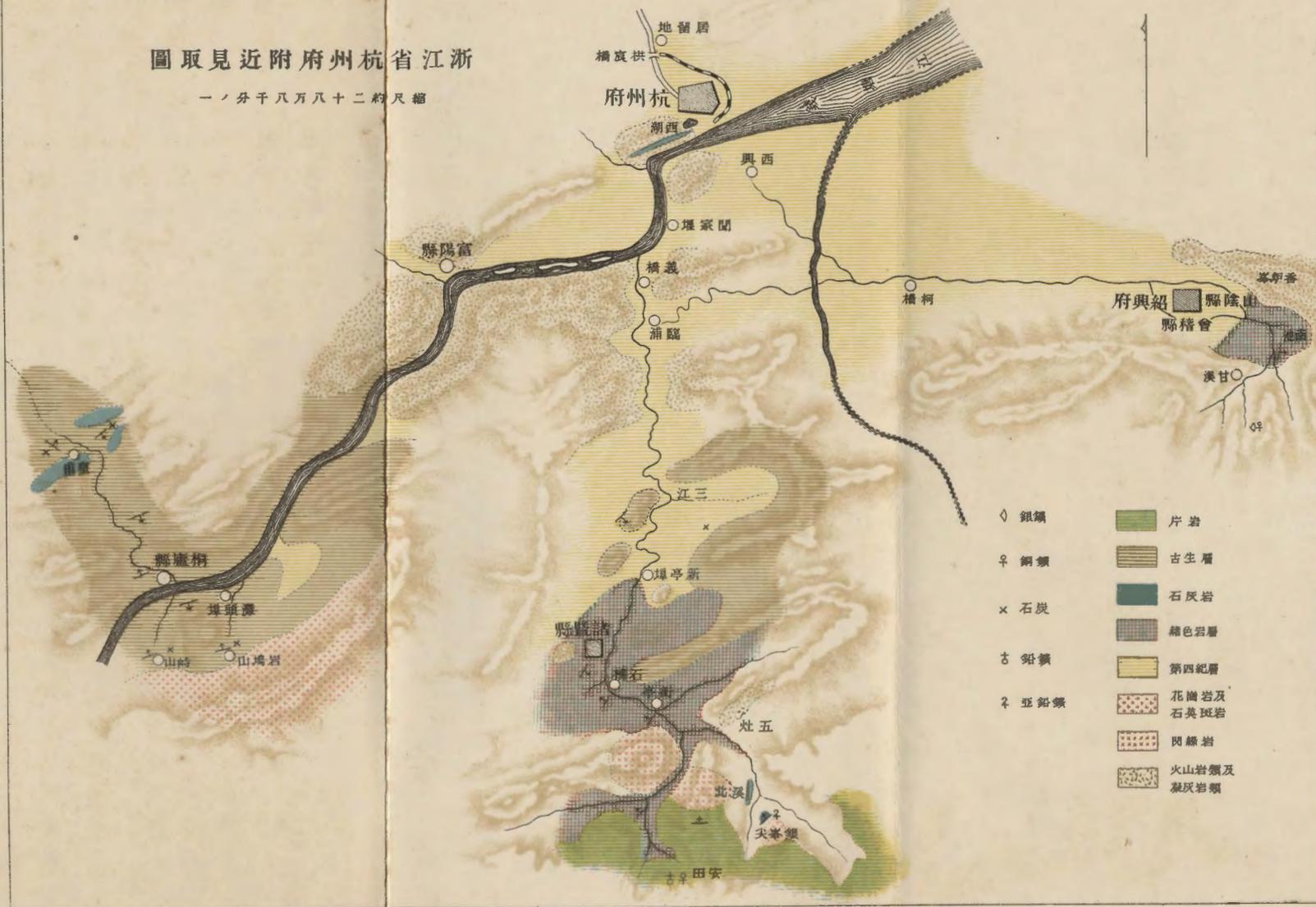
ラレタルコトヲ證セリ、而シテ浙江省ト及東對岸ナル本邦九州ト同一ナル此現象ハ兩々相對シテ地質構造並ニ變動ヲ説明スルニ有益ナル好材料タルヘシ

地形ハ錢塘江沿岸ハ一般ニ平坦ナル平地ニシテ水田多ク、而モ平地ノ間ニ急斜セル山嶽聳立シテ能ク本邦ノ地形ニ類似シ、杭州府西湖ノ火口湖ノ如キ觀ヲ呈シ紹興府ノ香爐峰ノ絶壁ヲナスカ如キ亦日本の風景ヲ遺憾ナク發現セルモノト云フヘシ

鑛產物ハ石灰石、無烟炭ヲ主トシ、金屬類ニハ銅、銀、鉛、亞鉛等ヲ產ス而モ皆往昔採掘シ盡シ若クハ品質甚タ貧劣ナリ、石材ハ凝灰岩ヲ主トシ之ヲ板狀又ハ柱狀トナシテ敷石、礎石、柱石、碑石等ノ用ニ供ス、而シテ其業盛ナリ、殊ニ富陽縣附近ヲ最トナス

# 浙江省杭州府附近見取圖

縮尺二萬八千八百一



- |       |           |
|-------|-----------|
| ◇ 銀鑛  | 片岩        |
| ♀ 銅鑛  | 古生層       |
| × 石灰岩 | 石灰岩       |
| 古鉛鑛   | 綠色岩層      |
| ♀ 亞鉛鑛 | 第四紀層      |
|       | 花崗岩及石英斑岩  |
|       | 閃綠岩       |
|       | 火山岩類及凝灰岩類 |

## 地名發音表

浙	江	省	Chet-kiang-sen
上		海	Shang-hai or Shang-hae (Native)
杭	州	府	Han-cheou-fu
錢	塘	江	Sen-tan-kiang or Sen-don-kong (Native)
富	陽	縣	Foo-yang-hsien
桐	廬	縣	Don-lu-hsien
義		橋	I-chao
臨		浦	Lin-pu
三		江	San-kiang or San kong (Native)
諸	暨	縣	Chut-chee-hsien
紹	興	府	Shao-hsin-fu or Zo-hsin-fu (Native)
甘		溪	Kan-chee or Ken-chee
拱	宸	橋	Kon-shin-chao
松	江	縣	Son-kiang-hsien
寧	波	府	Nin-po-fu
灘	頭	埠	Tan-tau-pu
皇		甫	Hwan-pu
岩	塢	山	Ngan-u-san
新	亭	埠	Sin-tin-pu
胡	公	臺	Foo-kon-tai
石		佛	Si-poo or Su-poo (Native)
街		亭	Kai-ting
溪		北	Chee-peh
銀	峰	尖	In-fou-cham
南		池	Nan-chi

(Native) トセシハ其地方ノ音聲ヲ示セルナリ

明治四十一年十二月廿五日印刷  
明治四十一年十二月三十日發行

定價 金五拾六錢

# 著作權所有

## 農 商 務 省

印刷者 東京市神田區通新石町三番地  
田中市之助

印刷所 東京市神田區通新石町三番地  
東陽堂支店

電話(本局九七〇)

發賣所 東京市神田區通新石町三番地  
東陽堂支店

# 地質調查所新刊圖書

地質圖 幅 壹 周 輪 上 下	同 輪 島 圖 幅 地 質 圖 上 說 明 書	同 上 縣 圖 幅 地 質 圖 上 說 明 書	同 周 防 洋 圖 幅 地 質 圖 上 說 明 書	同 珠 洲 岬 圖 幅 地 質 圖 上 說 明 書	同 人 吉 圖 幅 地 質 圖 上 說 明 書	同 仙 臺 圖 幅 地 質 圖 上 說 明 書
-----------------------------------	--	--	---	---	--	--

各定價

和文金參拾錢  
歐文金參拾五錢

定價

金參拾七錢

定價

和歐各金四拾五錢

定價

金貳拾錢

定價

和歐各金四拾五錢

定價

金貳拾五錢

定價

和歐各金四拾五錢

定價

金貳拾錢

定價

和歐各金四拾五錢

定價

和歐各金四拾五錢

定價

和歐各金四拾五錢

## 發 賣 所

# 東 陽 堂

東 京 市 神 田 區 通 新 石 町

# 地質調查所新刊圖書

地質調查所報告第五號

明治四十年度事業報告 (附圖一葉)

定價金參拾五錢  
井上所長

同 上第六號

越後國刈羽郡岡野町附近產油地調查報文 (附圖一葉)  
越後國魚沼油田地質調查概報 (附圖二葉)

伊木技師  
岡村要造

定價金五拾五錢

同 上第七號

九州金嶺精煉ニ關スル調查概報  
近江國田ノ上山產雲母ノ分析試驗報文  
近江國田ノ上山產雲母ノ溶解度試驗報文

清水技師  
安田囑託員  
河村技師

同 上第八號

本邦油田ノ狀況 (附圖一葉)  
石油井内ノ溫度調査

定價金五拾五錢

伊木技師  
伊木技師

地質要報四十一年第一號

石狩國空知郡美唄及奈井江煤田地質調查報文 (附圖四葉)  
清國盛京省陶家屯產珠羅紀植物化石 (附圖二葉)  
日本產新第三紀及洪積期有孔蟲化石

大築技師  
矢部囑託員  
矢部囑託員

定價金壹圓半錢

發賣所  
東陽堂

東京市神田區通新石町